

神の再解釈

ヌーソロジーから、
インテグラル理論と生命素粒子理論をかけ橋として、
愛着障害・神経発達障害を考察する

河野 宗太郎

【要約】

現代の様々な病理や問題の根底には、神経発達障害に関連する愛着障害が潜んでいるという見方がある。この愛着障害は、養育者との愛着形成期において問題があることで生じると言われている。愛着形成は自他の肌の触れ合いの位置に関連している。自他の肌の位置の触れ合いは、ヌーソロジーでは「神」の定義にあたる。人間型ゲシュタルトの世界観では、この自他の触れ合う肌の位置を蔑ろにし続ける傾向があり、これが愛着障害を発生させ、様々な問題を生じさせていると考える。そこで愛着障害を解決するには、この障害を生じさせているゲシュタルトから出て対応する必要があると考える。それは人間型ゲシュタルトの唯物論的世界観からではなく、霊性（持続）からの思考であると考えた。ヌーソロジーの理論背景をベースに、苫米地の超情報場仮説、生命素粒子理論、そしてケン・ウィルバーのインテグラル理論を用いて霊性（持続空間）について見直し、愛着障害、神経発達障害などについて考察することを目的としている。本稿は5つの連作の内の一つ目のレポートになっている。

I 【問題・目的】

【問題】

1. 世界のメンタルヘルスの現状

ユニセフは世界の10～19歳の若者の7人に1人以上が心の病気の診断を受けていると報告し、米CDC（疾病予防管理センター）は10代のメンタルヘルス問題を「国家的危機」と警告しているという。日本も例外ではない。高校生で30%、中学生で24%、小学4年生～6年生でも15%が「中等度以上のうつ症状」を訴えているとの調査結果もある。文部科学省によれば2022年に自殺した小中高校の児童・生徒は過去最多と史上最悪になった。こうした背景にはIT技術の進化、SNSの利用の増加の影響が度々指摘されている(1)。

こうした現代のメンタルヘルス傾向の背景には、人間型ゲシュタルト（近代以降）の世界観の影響があると思われる(2)。

2. 人間型ゲシュタルトの動因

人間型ゲシュタルトでは、客観世界に「私」がいる、という唯物論的世界観である。それは、無限に広がる広大な物質宇宙に偶然、無意味に存在している「私」という存在認識である。

この人間型ゲシュタルト（世界観）には、ゴーギャンの言う、「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」という存在に関する、答えの見つからない問いが常に潜在化するだろう。

この問いは、この不確かな世界に自己を存続させ続けようとする欲求を生じさせる。この背景には不安や恐怖という隠れた情動が潜む。

そして物理次元（人間型ゲシュタルト）での脳の機能はどのような状況であれ、自身の身体が生き延びることを最優先に考え、生存確率を上げることを最優先にする。こうして人間は長い年月を過ごし、生き残りをかけた歴史の情報が遺伝子に組み込まれる。

人間の抱える潜在化した不安を解消するために、人間はテクノロジーを手に入れ、利便さを追求し、自然を支配するよう駆り立てて行動するが、満たされることはない。

人々の多くは人間型ゲシュタルトの動因が、技術革新を遂げた現代社会を創り、毎日の生活を行わせているという実感はほとんどない。

3. 情報空間の限界効用

人は言語を用いることで、情報空間にその認識（気づき）の範囲を広げ発達した。その発達の速度は、これまでの動物の速度に比べ、加速的であった。そして人間は、生活の殆どを物理空間よりも情報空間に臨場感を優位に生きている。

先進国では飢餓で亡くなることはほとんどない。しかし、何万年もの単位で培ってきた無意識の防衛本能が「生き残る」という目的で生活してきたので、物質脳は必要以上に食べ物や資源、資産をため込もうとする。物質脳は未だ何万年前のメカニズムのままであるからだ。その為、古い脳の習性は、近年とくにIT技術以降の急激の変化に追い付いていない。

例えば生体は食欲をみたせば、満腹になり必要以上に食べよとはしない。つまり物理次元では限界効用が働く。しかし、貨幣は基本的に情報空間の産物なので、貯蓄に限界がない。そのため、身体的な満腹感が限界として感じられないので、無限に消費し、貯蓄することに歯止めが利かない。

限界効用の無い情報資産で、有限の物理次元の資源—食料、水、土地など—を買い占め続けるので世の中の格差が広がり、環境が破壊される悪循環のサイクルが続く（3）。

人間型ゲシュタルトによって潜在化する不安と恐怖がこのサイクルのエンジンになっている。

4. 人間型ゲシュタルトが生み出す、絆を希薄化させる生きづらい社会

狩猟収集民の時代では、移住生活が基本で、殆ど物理空間という次元で生活していた。生活の殆どを移住し、必要最低限の資源を循環させ、共生生活をしていた（4）。

農耕が始まると、定住生活が始まり人々に主従関係が生まれる。そして産業革命、情報革命という具合に文明が進むにつれ、システム化と主従関係による格差が広がっていった。

こうしてできた現代社会はその殆どが情報空間でのやり取りでまかなっている。人間は物理次元だけではなく、学校、職場、家族、交友関係、趣味など様々な関係性の中で生きている。

そして、それぞれの関係性宇宙の中で、他者のまなざしを基準とした幅的尺度によってつくられるヒエラルキーにおいて、自分がどの位置にいるのかが絶えず関心ごととなる。これらのヒエラルキーは、あたかも目の前に存在しているかのように実感するが、リアルではない。他者に植え付けられた価値観であって、事実ではない。

ヒエラルキーは情報空間の中にあるので、人によっては自己と他者の格差が無限に広がっているように体感するかもしれない。

近代資本主義による格差の広がりや、飢餓や病は減り、生活は豊かになった。これは素晴らしい点とし

て評価できよう。しかしこれに伴って、人間型ゲシュタルトが創る飽くことのない他者との比較意識が、虚無感や無くならない自己卑下感覚、満たされることのない自己肯定感などの、メンタルヘルスにおいて大きな弊害を生み出していると考ええる。

こうして人間は、意味もなくこの世に生み落とされ、日々果てしないヒエラルキーを上昇することを環境から強いられるように感じる。勝ち組になったと思っても、また頂点を維持しなければならないプレッシャーがある。

人間型ゲシュタルトであると、そのような感覚が、スマホという常に所持しているデバイスの窓口から、自分が社会の中でどのヒエラルキーにいるのかという感覚で常時無意識的に潜在化される。

SNS では、他者の世界は常に新鮮で、自分よりも優れているように見える。そして防衛本能から、目の前に触れ合える人間関係よりも、SNS でのヴァーチャルな人間関係に意識を奪われる。そうしてリアルな絆が希薄化する。

その結果、自己イメージが限りなく低められ、嫉妬心を駆り立てられる心理に陥る。それと同時に脳内ではストレスホルモンが生成され、心身が蝕まれる。この状態は、常に脳内が「闘争逃走」反応状態であるということである。これが鬱、自殺、様々な精神疾患の増加に繋がっている。

これが先進国特有のメンタル面での病や若者の自殺率の増加として表れていると思われる。

「私はどこからきてどこへ行くのか」という人間型ゲシュタルトの副作用であるといえる最初の動因は、現代では人間を増々妄映の世界に執着させ、人と人の絆を希薄にさせる社会として現象化していると思える。

5. 様々な障害と愛着障害－希薄な関係性と絆－

こうした現状の背景にある、根本的な障害が愛着障害であるという研究者がいる。

岡田 (2019) は、この 30 年の間、境界性パーソナリティ障害や子どものうつ、躁うつ、拒食や過食を引き起こす摂食障害、ADHD (注意欠陥／多動症) など「現代の奇病」と呼ぶべき不可解な症状が激増しているという。こうした症状は、戦前にはほとんど見られなかったもので、いずれも 1960 年代前後から突如増え始め、その後は増加の一途を辿っているという (5)。

これら「現代の奇病」は、共通して不安定な愛着パターンと強い関連があることがわかっている。幼い頃に母親との間で不安定な愛着を示した子では、これらの症状の発症リスクが大きくなる。愛着障害とは、主に乳幼児期の子どもと特定の人の中で情緒的な絆が十分に作れずに問題を抱えている状態のことを指す。そして愛着障害は第 4 の発達障害とも呼ばれる。

愛着障害は、神経発達症と同じような発達の偏り、遅れ、感覚過敏などの障害がありつつも、情緒の波が激しく絆について依存的であったり、逆に希薄である傾向もある。平気ですそをついたり人を傷つけたりもすることがある。

ここでいう絆とは、より具体的には子どもと養育者の肌の触れあいのことである。また愛着の問題は、様々な精神疾患、神経発達症にも関連しており、PTSD の診断に該当するという (6)。

6. 人間型ゲシュタルトの副作用である愛着障害と PTSD、そして負の連鎖

この PTSD は、生物化学的な側面からみると、脳の扁桃核においてマイクロサイズの傷を生成させる。

するとストレスホルモンであるコルチゾールが生成され、体の脆弱な部分の炎症を促進する。それに伴い身体は、MUPS (multiple unexplained physical symptoms: 複数の説明不能な身体的症状) 状態を呈する。この症状は病院に行ってもはっきりとした原因が分からず診断がつかない。病院を巡回し、最後に精神科を尋ねることが多い。さらに、最近の研究では、この脳の傷に対応する部位に関連した身体に癌ができるという報告がある(7)。

現代社会の行き詰まりを象徴するような問題、例えばいじめ、虐待、DV、離婚、うつ、依存所、自殺、サイコパシーといった問題に密接に関連しているのが愛着障害であるといわれている。そこには PTSD による様々な心身の疾患が隠れているということになる。そしてこうした問題は、世代間連鎖で、次世代にまで受け継がれていくという、負の連鎖がある。

7. 増加する回避型愛着障害

さらにこうした現状中で、愛着障害の中での「回避型愛着」スタイルの人が世界中で増えている。「回避型愛着」とは、一言でいえば、他人との親密な関係を避けるタイプだ。共感性に欠け、思いやりが苦手。しかし高い知的レベルを持つ人も多い。IT 革命は、人間をそのような「心の絆を求めない新人類」へと進化させているという。

人との親密な関係を避ける回避型愛着障害の特性は、幼年期から親との情緒的關係が希薄で、愛情や共感を期待しなくなった結果で形成されるという。絆を求めるほうが彼らにとってリスクがあるのだ。

愛着障害の不安型や未解決型が、親の愛情を求めるあまり不安になったり、揺れ動くのとは対照的に、回避型は最初から絆を「求めない」という戦略を取る。そのため、ある意味で安定している。こうした人と人との絆が希薄になっている社会の中で、回避型はより適応し、成功する。

8. 脱愛着化のリーダー

絆を求めない生き方は、世代を重ねるごとに次第に強化され、そのことに悩まない人たちが現れ始める。つまり「脱愛着化」が進んでいる。

ビジネスの世界では長い間、トップに向くのは共感型の人だと思われてきたが、近ごろは必ずしもそうとは言えない。たとえば、マイクロソフトのビル・ゲイツ氏は、幼い頃から人とのコミュニケーションに課題を抱えていたというが、信頼関係よりも法規や契約を優先したことにより、大きな成功を得た。もはや、ビジネスの世界に共感などは必要なくとも成功する現状がある(注3)。

そして社会はこのようなタイプを成功者として賞賛する。そして多くの人々が成功モデルとして認識し、自身の人生や子育てに採用する。こうして回避型が増加する世のサイクルが出来上がっていると言える(5)。

9. 回避型愛着障害の症状

回避型愛着障害は、人との絆を求めない代わりに言いようのない不安や人生への虚無感を抱えやすい。それは彼らが、感情を普段は強く抑え込んでいるパーソナリティ傾向にあるからだ。そのため、回避型は、ある日突然不安に襲われパニック障害や心身症になったりすることがある。さらに突然キレて何をするかわからなくなったり、自殺衝動に駆られることもある。

人生の本当の目的や信念を持たない傾向にあるため、安定しているようであり、実はストレスを受けやすい。だから、感情を紛らわすために、常に何らかに依存している必要がある。その対象はビジネスであったり、ゲーム、薬物になる。

10. 愛着障害の子育てと増加する神経発達症

保護者に愛着障害傾向があると、子育ては不安定な傾向になる。そして多くの回避型愛着障害は、子育てが苦手であるといわれる。赤ちゃんを見るとぞっとして、可愛いとも思えなければ、どうあやして良いかもわからない場合もある。回避型はたいていマニュアル人間で、ルールと統制で物事を考える傾向が強いため、赤ちゃんなどという厄介な存在は、まともに作動しないロボットと同じようなものと映る(5)。

一方で、現在増加している神経発達障害の子どもたちは、前頭前野の実行機能が弱い傾向があり、かつ感覚過敏であるので、不安や恐怖の情動が強い。それに伴い知能、学習、身体機能において発達の凹凸がある。このような状態であると、神経発達障害の子どもには、画一化されたマニュアル的な子育てにはそぐわない。

一方で、社会は医療、福祉、教育においてもマニュアル化が増長している。回避型は特にマニュアルに外れた子ども達がストレスの対象と映り、適切な子どもの愛着形成が成され辛い傾向があると言える。こうして神経発達症の症状は悪化し、増加する背景がある。

また政治家、経営者、成功者、歴史的偉人にはサイコパシーが多く、サイコパシーは愛着障害を患っていることが多いという。他者に共感するためのミラーニューロンが、管理者側には不必要だからだ。脱愛着化のリーダーの下で暮らす社員や国家の下で育つ子どもは、愛着障害を患いやすいといえる。

※

このように、現代人が抱える「生きづらさ」や多くの問題の根底に、愛着の問題が根強く横たわっていることが、最近明らかになってきた。そして愛着が現代社会に起きている病理を理解する鍵になるのではないかと、世界的な関心が高まっている(8)。人間型ゲシュタルトは唯物論的世界観が優位であるため、人と人との絆を希薄化させる傾向がある。つまり絆の希薄化によって生じる愛着障害と密接に関わっているということになる。

11. 次元を上げて解決する

ゲシュタルトとは、個々の情報を全体として把握する知覚認識のことを指す。平易な言葉で言えば世界観とも言い換えられる。ゲシュタルトはホメオスタシス(恒常性維持機能)に関連し、一定の知覚認識を維持しようとする。ゲシュタルト(世界観)から外れた事象は、スコトーマ(心理的盲点)となって、文字通り認識することができない(注6)。

この点から考えると、マニュアル化が得意な回避型愛着障害にとって、神経発達症は心理的盲点になりやすいといえる。人間型ゲシュタルトは、唯物論的世界観である。苦米地によれば、宇宙は抽象度の高低に並ぶ、情報空間の連続体であり、最も抽象度の低いごく一部の空間が物理次元である。物理次元は情報空間の写像として存在する。

ここから考えると、人間型ゲシュタルトは、情報空間のほんの一部分の物理次元しか認識対象としておらず、他の情報空間の事象は認識できない。これが霊性やオカルトが人間型ゲシュタルトでは認識されない理由であると考えられる。霊性やオカルトの領域は、人間型ゲシュタルトの見解では、なかったことにされ、無視される。

現代社会の病理のコアには愛着障害があるが、これは、これまでに述べたように唯物論的思考の人間型ゲシュタルトの副作用として起こっていると考える。この愛着障害の問題を人間型ゲシュタルトから解こうとしても、「計算量の複雑性の問題」で解決は困難である。

「いかなる問題も、それが発生したのと同じ次元で解決することはできない」というアインシュタインの言葉はこうした背景にあるといえる。

つまり、この愛着障害の問題の解は、人間型ゲシュタルトの領域ではないところにある。それは人間型ゲシュタルトの心理的盲点になって認識できない。つまり、人間型ゲシュタルトから出てこの問題にあたる必要がある。それは霊性（スピリチュアル）であり、持続空間の領域のことである。

【目的】

人間型ゲシュタルトは唯物論的解釈に依っている。それはエントロピーが増大する方向に物事を解釈する傾向がある。このゲシュタルトにおいて、モノの中に意識があるという世界観の人間は、エントロピーの法則を心理的にも模倣する。その結果、時代を経るごとに人間社会の絆が希薄になるのもエントロピーの法則が働いていると思われる。

これが愛着障害という病として、現代社会に表現（中和）されている状況であると思われる。この病根から様々な疾患が生じ心身を壊し、家族、社会をバラバラに壊していく。この問題を解決する領域は $\psi 3.4$ の次元観察子だ。これは最小精神といわれ、霊性の領域の入り口である。これは持続空間であり、シュタイナーとヌーソロジーの関連性で言えば重心（0）から始まり、触覚から連なる生命力の領域である。持続空間なので、ネグエントロピーの法則が働く。原理上、心身の病、障害が癒え、人と人との繋がりが再構築され、社会が活性化するとと思われる。

人間型ゲシュタルトでは、絆形成の要である愛着という、自己と他者の肌の触れ合いの次元が、なおざりにされ無視されることによって、様々な問題の要因となる愛着障害が生まれた。これに対してヌーソロジーにおいては、自己と他者の肌の触れ合いの位置は「神」の定義であり、価値観が全く反転している。

顕在化における $\psi 3.4$ の霊性の次元から始まる次元観察子から愛着障害を再解釈し考察する。それは言い方を変えれば、神の再解釈ということになる。

ヌース理論は広大で抽象度が非常に高いこともあり、臨床例として扱っている例が少ない。人間型ゲシュタルトの範囲を超える霊性までの発達を含めた臨床的な地図は、私が臨床経験から出会ってきたインテグラル理論、生命素粒子理論が存在する。これらの理論は霊性を「人間の観点」から解釈している。一方ヌーソロジーはオコツトという人間を超えた存在からの情報を、人間が解読して構築し続けている理論体系である。インテグラル理論、生命素粒子理論を含めると、霊性領域から、愛着障害の再解釈がより日常的に理解し、応用できると考える。メタ倫理の観点から、ヌーソロジーと日常社会との関連について、これらの二つの理論を橋渡しの役割に添え、考察することを目的とする。

参考文献

- (1) 10代のメンタルは「史上最悪」――世界的危機に応えるシリーズ100万部超『スマホ脳』著者最新作『メンタル脳』緊急刊行決定！ | 株式会社新潮社のプレスリリース (prtimes.jp)
- (2) アンデシュ・ハンセン (2020) 「スマホ脳」新潮新書 5
- (3) 苫米地英人 (2015) 「洗脳経済2015」 ビジネス社
- (4) ルドガー・ブレグマン (2021) 「希望の歴史 下」文藝春秋 107
- (5) 岡田 隆司 「ネオサピエンス」(2019) 文藝春秋
- (6) 中野明德 「ジョン・ボウルビィの愛着理論 ―その生成過程と現代的意義―(2017),別府大学大学院紀要
- (7) 苫米地英人 「超瞑想法」(2017) PHP 研究所 18
- (8) 岡田 隆司 「死に至る病」(2019) 光文社新書

神の再解釈

ヌーソロジーから、
インテグラル理論と生命素粒子理論をかけ橋として、
愛着障害・神経発達障害を考察する

河野 宗太郎

II 霊性を現代医療や臨床心理学に統合する意義

【要約】

人間型ゲシュタルトにより、科学技術が発展することで近代医学モデルが誕生した。このことで、多くの病や障害が克服され、人類は大きな恩恵を受けている。その一方で、医学モデルでは対応が困難な愛着障害をはじめとする様々な疾患や障害が増加している。ほとんど知られていないが医学モデルや心理学の背景には精神的／霊的伝統がある。霊的伝統の核心は非二元であり霊（スピリット）である。これはヌーソロジーにおける重心や持続に関連している。この霊性を含めたアプローチの意義について考察した。本稿は5つの連作の内の二つ目にあたる。

1. 限界を迎える医学モデル

ゲシュタルトとは、知覚様式のことを指す。全体的なまとまりの構造のことで、平易な言い方では世界観とも言い換えられる。つまり、人間型ゲシュタルトとは近代から生じた知覚様式のこと、それ以前の知覚様式とは異なる。人間型ゲシュタルト以前の知覚様式は、万物に霊的な要素を含めて思考していたことが知られている。宇宙は神や精霊が作り出しているという神話的な世界観がその代表的な観点であるとも考えられる。一方で、近代から生じた人間型ゲシュタルトの特徴としては、「時間と空間という3次元で構成されている宇宙は物質で出来ており（唯物論）、その世界の中で、精神と物質が別物である（主体と客体の分離）」という知覚様式である。

こうした知覚様式で生命を眺めると、生命現象は3次元空間に存在する物質的な存在であるという鑄型に、知覚し、経験された情報を入力することになる。そして、出力された情報は、唯物論的な解釈結果ということになる。近代以前の生命観は、近代の人間型ゲシュタルトのように分類、分析する機能が発達していない。その為、殆どすべての知覚、経験された現象を呪術的、神話的な鑄型によって解釈する。その結果、病気や障害、災害を祟りや呪い、神の怒りといった現象として解釈することになる。

そのように解釈されると、原因である精霊や神の霊的法則や規律を守ることが優先され

る。したがって、対応も加持祈祷や生贄、除霊、浄霊といった方法が施されてきた。こうした方法論で現代でも効果的な方法として残っている知恵や技術は無数にある。その一方で、近代に入り科学技術の発展により、病の原因は病原菌やウイルス、遺伝的な疾患として解釈し、対応されることになった。その結果、不調がある場合にはまず医者に行き、病気ではないかを診断してもらい、もし診断が出れば、薬を処方してもらうなどの治療を受けるという医学モデルというゲシュタルトが出来た。その結果、多くの病の解明が進み、平均寿命は延び、感染症も激減することになった。

しかし、医学モデルがうまく機能するケースばかりではなくなった。むしろ、現実にはそうでないケースが目立ち、ますます多くなっている(1)ことは前稿でも述べた。

ウィルバーによれば、近代以前では物質、心、魂、霊といった領域が混同されていた時期であった。近代に入り、霊的なドグマから物質が差異化されることによって、前述したように医学モデルが発展し、公衆衛生が発達し、多くの命が救われることになった。しかし、人間型ゲシュタルトが生み出した医学モデルは、すべてを物質的要素に還元する。つまり命／霊、魂、心といった領域をすべて物質領域で解釈しようとすることになる。

こうしたゲシュタルトでは、延命治療の問題や、増え続ける若者の自殺、不定愁訴の病といった解決は困難になる。これが現代の臨床心理学や現代心理学におけるスコトーマ(心理的盲点)になっていると考える。そもそもこれは、命／霊という領域を、すべて物質領域に還元し解釈するという人間型ゲシュタルトの知覚様式が大きな因子になっている。

医学モデルの限界が示唆されている今日、近代の行きすぎた霊性領域と物質領域の差異化から、統合という道が様々な分野で研究されてきている。こうした背景から、現代心理学や臨床心理学について霊的は背景も踏まえながら概観してみたい。

2. 近代心理学の根幹には精神的／霊的(スピリチュアル)な伝統がある

心理学は1879年のライプツィヒ大学の実験室にヴィルヘルム・ブントを始まりとして突然誕生したかのように教科書には記載されている。しかしその前にも心理学の先駆者達は沢山存在している。

その中でも影響力の大きな人物として、ドイツの物理学者、心理学者であるグスタフ・フェヒナーがいる。フェヒナーは刺激と感覚の強度との関係を量的に研究して精神物理学を創始し、「フェヒナーの法則」を立て、のちの実験心理学の祖となった。彼は精神的な現象を調べるために、厳密な方法と原則に従って測定と実験的観測を行った人物であったと言われ、語り継がれている。しかし、フェヒナーが霊性／スピリチュアルにもともと基礎をおいていたことは殆ど知られていない。殆ど知られていないフェヒナーの著書「死後の生」において、彼は「身体・心・スピリットが意識の成長に関する三つの段階である。人は分離した事故に対して死ぬことによるのみ、普遍的なスピリットの広大さへと目覚めることがで

きる」という哲学を主張している (2)。

あるいはフロイトは、イドの概念を、ゲオルグ・グロデッグの「エスの本」から直接借りてきている。そしてこの本は、宇宙的な道（タオ）、すなわち命の源である普遍的なスピリットの存在を踏まえて描かれたものだ。日本でも近年よく耳にするマインドフルネスは、上座仏教のヴィッパサナからの智慧と技術である。幕府公認の駆込み寺・東慶寺には離縁を求める女性を保護しており、今でいう DV シェルターの機能を行っている背景があった。心理療法としての内観療法(内観法)は、吉本伊信 (いのぶ) が浄土真宗の一派に伝わる求道法を土台にして創始した。他にも例はあるが、こうした例が気づかせてくれるのは、近代心理学・臨床心理学の根幹には精神的／霊的 (スピリチュアル) な伝統があるということである。

2、スピリチュアルと重心

ケン・ウィルバーによって提唱されたインテグラル理論とは、霊的領域を含む、自然科学・社会科学・人文学といったあらゆる学問を統合し、包括的に考察しようという試みから生まれた。こよれば摩訶不思議なビッグバンにより、物質が誕生し、次いで生命が生まれ、進化を経て心や魂を持つ人間が発達していったという「霊→物質→生命→心→魂→霊」という形で、同心円状に発展していく。こうした発達・進化の段階において、霊は全ての段階での基底であり最高位の段階としてとらえられている。古今東西の霊的伝統の根幹である霊とは「非二元 (ノンデュアル)」のことを指す。これは神道で言えば中今であり、今ここというマインドフルネスを指す (3)。

「今ここ」という、「気づき」の中今・マインドフルネスの経験は、脳神経の領域では帯状回という、大脳皮質の体性感覚皮質領域からの入力を受に関連している。体性感覚はいわゆる五感 (視覚, 聴覚, 味覚, 嗅覚, 触覚) の中の触覚を含む感覚である。

つまり要約すると霊性 (非二元) とは、現代社会で理解されやすい異なる文化や言語的表現で言えば、中今 (神道的表現)、空 (仏教的表現)、スピリット (キリスト教的表現) というようにそれぞれ解釈されている。これらを解釈する人間は全て同じ大脳を持ち、その大脳では帯状回に関する部位に関連する。そして帯状回は、触覚を含む五感からなる。ニューロロジーでは、触覚は自己と他者の皮膚の感覚から始まる「重心」である。これは言い換えれば神経系に非常に関連している。つまり、自己と他者 (重要な養育者) との肌の触れ合いの程度に左右される愛着障害に非常に関連していると言える。

こうした背景から考察すると、霊性を物質主義的観点に還元してしまっている、人間型ゲシュタルトから派生した医学モデルが限界を迎える中、対応が困難な様々な病や障害が増加している背景には、その病や障害の中核に、先述べた「重心」である神経系に関連する神経発達症 (発達障害) と愛着障害が絡んでいると考える。

これらの対応には霊性、つまり、神経系についてのアプローチが有用である。それはつまり、今日注目されているマインドフルネスを含む様々な瞑想法や、気功や祈祷、遠隔治療などの伝統的・霊的な施術を再考察することも重要になってくると考える。

こうした中で、マインドフルネスや霊的技法について、振り返ってみたい。

3. マインドフルネス瞑想におけるサティ（気づき）の応用

20年以上前から、臨床現場ではマインドフルネス瞑想・心理療法が徐々に社会的に認知されるようになってきた。今では小学校でも、簡単に応用していることもある。

ミャンマーでは、出家修行者でも習熟が難しいサマタ瞑想ばかりが指導され続けると脱落者が多いため、多くの人が実践しやすいヴィッパサナー瞑想が前面に指導される背景があった。その一部がさらに簡略化され、心理学化されて、覚りに必須のダンマをそぎ落してしまったのがマインドフルネス心理療法であるといわれる(4)。

マインドフルネスを行うことで、免疫力、集中力、ストレス耐性、リラクゼーション効果など様々な肯定的な効果があることが科学的な客観的事実として知られている。しかしその多くの目的は会社での生産性を上げる、美容、健康、社会的、経済的成功などを目的としているとも解釈できる。これは、人間型ゲシュタルト社会を強化し、そこに適応する道具として扱われているとも言える。

一方対照的に仏教のさとりにへの修行とは、サティ（気づき）の力を高め、涅槃と呼ばれる瞬間までただ気づいている状態を目指す(5)。このサティ（気づき）とは、マインドフルネスのことである。また、サティ（気づき）は仏陀が影響を受けたヴェーダの本質である非二元や、インテグラル理での霊（スピリット）そのもののことを指す。そして、霊／非二元は霊的伝統の根幹でもあり、持続・重心に関連する。

東洋の霊的伝統の教えでは、私たちの生活する日常生活は、幻想であり、その幻想から覚醒することが目的であるとされる。そして西洋の霊性の中では、人間の幻想からの覚醒は「赦し」として表現されてもいる。つまり東西の霊性は、人間型ゲシュタルトからの覚醒という点で共通する。ニューソロジーにおいても、人間型ゲシュタルトからの妄映から覚めることが重要だ。

4. QE：サティ（気づき）の応用として、自己他者の触覚（重心0）を応用した技法

超越瞑想の教師であった、ドイツのフランク・キンズロー氏は、カイロプラクティック技術と知識、そしてヴェーダの技術と知識から独自の QE（クオンタム・エンライトメント）というヒーリングと瞑想技術を生み出した(6)。

この技術は、自己他者の皮膚の感覚（触覚）／重心（0）をきっかけとして、純粋なサテ

ィ（気づき）に至ることで、無、ゼロの場に容易にとどまり、治癒を促す。

「気づき」とは、非二元などの霊性の伝統的な教えでは、霊（スピリット）のことで、すべての起点（0）であると同時に、物質、生命、心、魂を包摂している最高位の段階でもある。この純粋な（サティ）気づきに至ることで、ストレスで損傷された領域がネゲントロピーの力で回復する。つまりマインドフルネスを含む、様々な瞑想による効能は、霊というネゲントロピーの力の作用の力といえよう。そして、ニューロロジーでは「霊」とは重心から始まる持続であり奥行きでもある。

5. 臨床現場で多く関わる愛着障害と神経発達障害

神経発達障害は、その特性が色濃い場合だと就学前に発見される。IQが高かったり、大人しい子どもであったりすると、障害特性の発見は遅れ、思春期、青年期、大人になるまで自他共に自覚されない場合も多い。この場合の状態は、よく発達障害のグレーゾーンとも言われ、人知れず理由の分からない生き苦しさを感じながら生活していることがある。

人間型ゲシュタルトの幅化による価値基準社会では、神経発達症の人々は発達の凹凸があるために生きづらい。この社会では、幅化の価値基準を満たさない場合は、その個人の努力と能力不足であるとみなされがちだ。そして当人は萎縮し、自信をなくし、自己を責め、ますます能力を発揮できない負のサイクルにはまり込む。そうした状況で、神経発達症を持つ子の親は人間型ゲシュタルトの創る社会的ヒエラルキーに我が子が適応できず生きていけないのではないかと、将来が見えない、と絶望と不安に苛まれやすい。こうした事情は深刻で、学校ではいじめ、家庭ではDV、虐待、離婚、そして自殺という現象につながる。こうして神経発達障害のある子どもは愛着障害をも患う可能性が飛躍的に高まる。

6. 支援者の対応

これに対し、支援者は発達の特性を発達検査を用いて明確にする。そして発達の凹凸を見出し、その状態に合わせて支援プログラムを作成し、必要な専門機関につなげる。そこで学校や社会で自分の能力を上手く発揮する為の環境調整と、療育的訓練、心理療法が行われる。また、障害受容をサポートするための家族ケアを行う。こうした過程は、端的に言えば「社会適応」という言葉に集約されると思われる。しかし、この場合の適応先の社会とは、人間型ゲシュタルトの創る社会である。そこでは、その人間の幅的・数値的な価値に還元されない、ありのままの存在への価値にではなく、経済的成功やステータスに無自覚に価値を置く傾向が強い。つまりこうした観点からの解釈においては、この「社会適応」とは、様々な障害や症状の根幹になっている愛着障害を発生させるシステムという「社会」に最適化させるということになる。

愛着障害、特に回避型が増加する背景には、霊性を学問する土壌が現場には皆無であった

ことが言える。その為、対応法が投薬治療や表面的な対処療法に終始している傾向がうかがえる。霊性とはヌーソロジーでは持続空間のことを指す。また、持続空間とは人間の記憶のことを指す領域だ。この領域は、昨今話題の人工知能や認知科学の領域が発展している。さらに、この領域を含めて研究された臨床的、伝統的な気功の技術として理論構築している苦米地の超情報場仮説と生命素粒子仮説が存在している。

前項で見てきた通り、人間型ゲシュタルトをベースにした医学モデルでは限界がある(1)中、霊性を含めたアプローチが重要になっている。

ヌーソロジーでは、人間型ゲシュタルトを超越した領域として顕在化における ψ 3.4の領域がある。霊性の領域は長く人類に経験され、研究されてきているが、明瞭な構造と幾何学的な構造としての解釈がほとんどなされていない。

そこで、ヌーソロジーをベースに、苦米地の超情報場仮説や生命素粒子理論、またケンウィルバーのインテグラル理論を含めて考察していくことが本稿の全体の方向性である。

参考文献

- (1) 岡田尊司「愛着アプローチ」角川選書 2018 p15
- (2) ケン・ウィルバー「インテグラル心理学」日本能率協会マネジメントセンター 2021
- (3) ケン・ウィルバー「万物の理論」日本能率協会マネジメントセンター 2019
- (4) 石川勇一「ブッダの瞑想修行」サンガ新書 2023
- (5) 草薙龍瞬「大丈夫、あのブッダも家族に悩んだ」筑摩書房 2022
- (6) フランク・キンズロー「瞬間ヒーリング QEのすべて」ナチュラルスピリット 2023

神の再解釈

ヌーソロジーから、
 インテグラル理論と生命素粒子理論をかけ橋として、
 愛着障害・神経発達障害を考察する

河野 宗太郎

【要約】

本稿では、霊性／持続空間での地図を考察することを目的にしている。マインド（心）とは記憶で出来ており、この分野についての研究の一つが心理学や臨床心理学ということになる。そこで、心理療法の理論について、マインド（心）レベルのみの探求は人間型ゲシュタルトの領域から出ていることにはならない。I【問題・目的】で述べたように、本稿は人間型ゲシュタルトを超越（超えて含む領域）した領域から考察することを目的としている。つまり霊性／持続空間からの考察は、ヌーソロジーで言えば $\psi 3 \cdot 4$ 領域となり、すでに $\psi 1 \cdot 2$ の人間型ゲシュタルトでのマインドをすでに含んでいる。こうした霊性／持続空間領域からの理論はケン・ウィルバーのインテグラル理論と、苫米地の超情報場仮説・生命素粒子理論がある。これらの二つの理論を用いながら、ヌーソロジーとの関連性を考えつつ、霊性の地図について考察したい。本稿は5つの連作の内の三つ目にあたる。

III 霊性の地図作成

1. 重心（0）は霊（非二元）であり、「気づき」である。

ケン・ウィルバーの理論的背景による、「永遠の哲学（図1. 2）」(1)によれば古今東西で様々に異なる文化と時代に生きた人々は、現実、自己、世界、存在の本質に関して共通する知覚を記録している。この知覚はあらゆる宗教の共通の基盤を形成する。

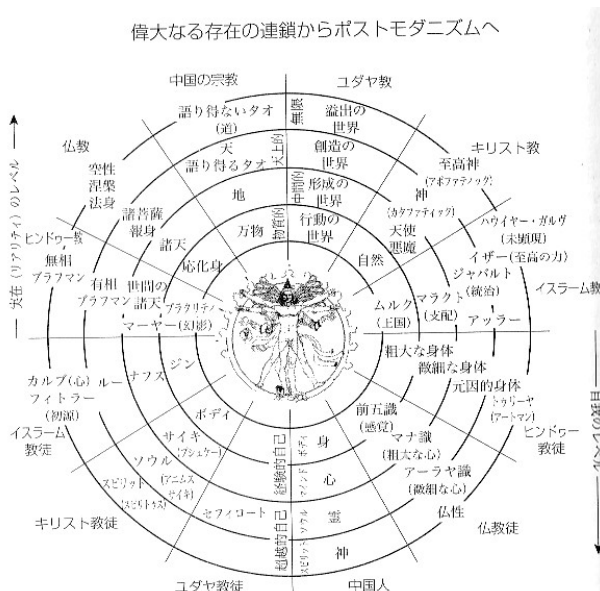
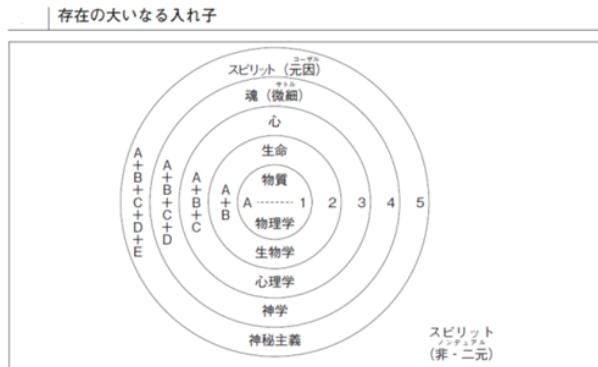


図1.2 さまざまな叡智の伝統における偉大なる連鎖
 (ヒューストン・スミスによる。ブラッド・レイノルズ作成、転載許可済)

これによると、現実とは、物質、身体、心、魂、スピリットといった諸段階で構成されている。この段階の関係性は、後の領域は、前の領域を超えているが含んでいるという、入れ子式になって展開する。それを簡略化したものが図1になる(2)。

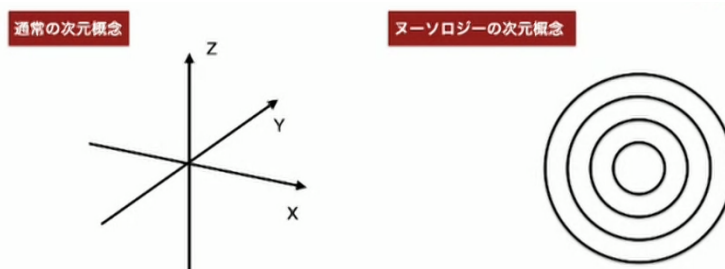


スピリット〔精神／霊〕とは、最も高次の段階（ウェーブ）である（完全に超越的である）と同時に、すべての段階（ウェーブ）にとっての常に現前する究極の基底（グラウンド）でもある（完全に内在的である）。スピリットは、すべてを超えていると同時に、すべてを含んでいるのである。

基本となる諸段階

霊的な伝統や宗教、そして心理療法の本質的な確信は、「気づき」につながる。「気づき」とは、図1にあるように永遠の哲学で言う「非二元」であり霊のことを指す。それは最も高次の段階であるとともに、すべての段階の基底でもある。「気づき（非二元）」は様々な霊的な伝統では道、無、空、真我、「中今」ともいろんな呼び方をされている。ヴェーダの瞑想伝統から発展したQE（クオンタム・エンライトメント）(3)という技法では、触覚を元に「純粹な気づき」に至り、様々な症状を癒し、障害の改善を図る技術として用いられている。「気づき（非二元）」は生命現象そのものでもある。それは重心（0）に関連すると考える。

ちなみにニューソロジーの時空間は人間型ゲシュタルトの直線状での世界観ではなく、以下の形をしている。これは上図「大きい存在の入れ子」と形を同じ構造になっている。



人間は、胎児期の「気づき」すなわち知覚から発達する。シュタイナーとニューソロジーの対応において、自己と他者が触れ合う（重心0）触覚というすべての感覚のベースから発達し主観空間を獲得する（ ψ 3）。それは生命感覚そのものである。その後、様々な感覚を発展させて元始陽を構成する。

2. 「気づき」は「0」

古今東西の様々な霊的伝統の本質は霊（非二元）であり「気づき」である。仏教では、これは「空」と呼んでいる。ここで、仏教という切り口から「空」を数学的な定義から考えてみる。苦米地による論文では「空」とは「無と有」を包摂する概念であると定義する（4）。「無と有」は数学的な記述では「0と1」ということで記述できる。また、「0」は数学的に無限「 ∞ 」でもあるので「 ∞ と1」というようにも記述できる。この場合の1とは、人間型ゲシュタルトの中で、物理次元（妄映）で人間が便宜上何かの数を数える際につける数字である。

純粋な気づきは、統一場にも関連しているという主張がある。量子物理学の発見によって、分子や原子や素粒子は、その根底にある統一場の振動から発生しているということが明らかになった。物理化学では、そこから素粒子→分子→原子→細胞→…→生物、という具合に展開していくとみる。その確率は、「廃材置き場の上を竜巻が通過した後で、ボーイング747ジェット機が出来上がっているのと同じような確率である」とも言われ、偶然の確率では到底成しえない。つまり統一場（重心0）には進化方向性と創造的な知性が内在している、と考える解釈を本稿では採用する。

永遠の哲学を紐解くと、この方向性は、自己中心性の減少を伴いつつ、差異化と統合をホロニックに繰り返し進む。この過程は、ヘッケルの反復説が参考になる。自己と他者の関係性の中で、それを等化する機能（ヌース）と中和させる機能（ノス）の関係性で進化が進んできた。進化の方向性を促進する役割が伝統的な霊的な智慧や技術に相当する。これは自己の気づきの範囲を広げ、深める。反対に物質的な方向性を担うものが他我化に関する。

3. 自我と自己

自己紹介で「私」を説明するとき、父、母、出身地、趣味、身長、体重、生年月日など、様々な他者との関係性を列挙する。しかし、それらの説明は、自己（ $\psi 5$ ）についてではなく、自分との関係性（ $\psi 6$ ）についての記述である。つまり「自己」は記述できない無色透明なものだ。こうした観点を踏まえ、苦米地は自我を様々な他者との関係性の結節点である点として定義する。それは「あるともいえるし、ないともいえる」、「0」でもある面積も体積も持たない数学的な「点」だ。「ある」と言われる部分は、自己紹介で記述できる他者との関係性で生じる情報部分（ $\psi 6$ ）のところを指す。

円心関係により、点があれば円がある。円とは、そのまま他者との縁起の縁のこととも言える。つまり、他者とのさまざまな関係性ネットワークのことである。先に述べたQEという、非二元や瞑想の技法につながる方法は、重心である触覚をきっかけに純粋な気づきである

空に至る。そこは「気づき」という点であり、生命現象の原点でもある∞でもある。完全秩序に限りなく近い状態で、生命の癒しや治癒の原点の場である。

4. 他我化の増加と「気づき」減少

触覚は純粋な気づき（重心）に関連するが、神経発達障害や愛着障害は、触覚過敏をはじめ、様々な感覚過敏を呈していることが多い。また、先天的にも後天的にも消化器系が弱いことから、消化能力に問題がある場合が多い。その為、皮膚の症状が多く出やすい。加えて現代は、子どもの時から自然と触れ合う機会や遊びが減っており、ゲームやタブレットなどでの人口的なヴァーチャルでの遊びが増加していることから、直接自然環境からの神経系への刺激が減っている。

神経系が脆弱で過敏であると、極力不快な刺激を減らしたいという欲求が強まる。すると、内にこもりがちになり、ますます神経系が育つ機会が減る。こうした快を追求し、不快を避けることをベースにした自己防衛反応に関する思考と行動は、不安と恐怖をベースにした扁桃核優位の思考である。これは脳内のストレスホルモンを生成する「闘争逃走」反応に関連している。すると、創造性やリラククスなどに関連する、人間を人間たらしめている前頭前野での実行機能が低下する。

愛着障害や神経発達障害の症状の要は、不安や恐怖などの衝動的な情動を抑制することが困難で、かつワーキングメモリやメタ認知、注意を維持するという実行機能の障害があることはこのような背景があると考えられる。こうして所属している環境—家族・学校・職場などでコミュニケーションや作業でミスやトラブルが増え、居場所がなくなり自信の喪失につながる。また、現代の生活習慣、文化的背景から子供のころから人工の世界観の中で浸る時間が多い。こうした状況は人間が創った規範で物事を思考する癖がつく。人間型ゲシュタルトによる潜在化する不安や恐怖を抑えようと、生き残るために他者の価値観や知識を追い求める。こうした要因から現代は、自身の心身からの「気づき」からの思考と判断が失われている。つまり他我化しやすい社会化が昨今では相当な勢いで進んでいる。

6. 人類史の霊／「気づき」の範囲と深さの発達

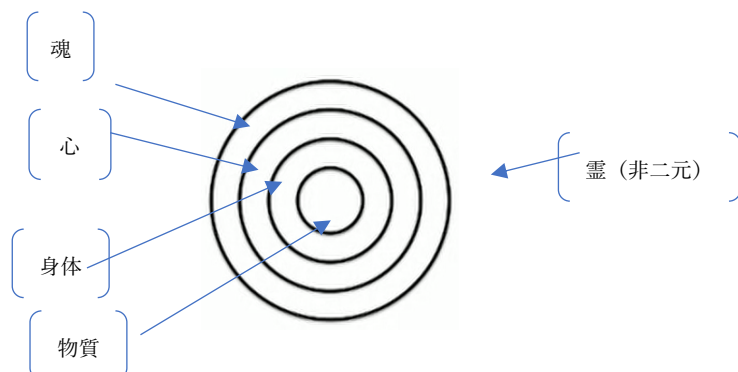
苦米地によれば、情報とは記憶のことである。そして、物理次元（ケイブ・ユニヴァースにおける時空 M）は情報空間の写像である。情報空間は抽象度の高低の順に連続的な階層性を持つ。そして、最も抽象度の低い次元が物理次元である。また、抽象度には位置エネルギーが内在し、抽象度が高ければ高いほど位置エネルギーが高いことになる（※注1に詳細有り）。

一方、インテグラル理論を提唱するケン・ウィルバーは、こうした苦米地のいう情報場を

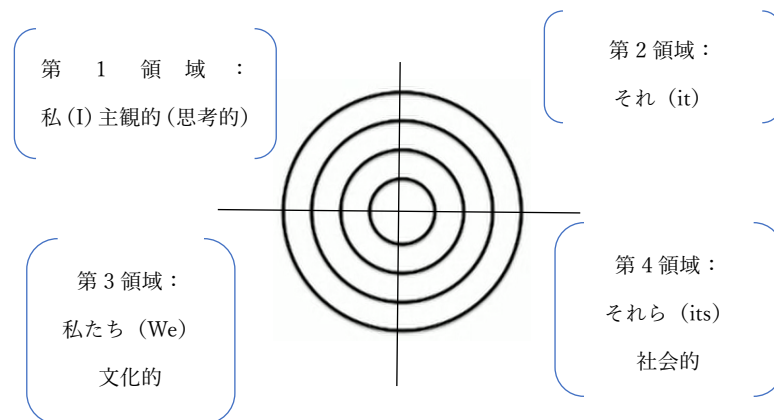
より整理して提示している。つまり、ウィルバーによれば、情報場は広大な形態形成場でもある。これはある種の集合的な「記憶」の場であり、仏教の阿頼耶識や神智学のアカシックレコードのようなものだ。これはホロニック的に展開する発達論的空間を形作っている(6)。

この記憶の場は、物質、身体、心、魂、スピリットという抽象度の高低の順に連鎖的に並んでいる。生命が差異化(分化)と統合の過程を経ながら進化・発達を経るごとに、認識の範囲が広がってくる。これに伴い、この発達論的空間の場の中の認識範囲が広がっていく。この発達過程は自己中心性の減少過程としても観察される(6)。自己中心性の減少、つまり利他性は多くの伝統的な霊的叡智の核心でもある。瞑想や行を通し、神経系を鍛え、気づきの範囲を広げ、深めることで、他者へ思いやりが増し、争いと差別が減っていく。これは霊性の窓口としての宗教の役割であった。

その際に用いられている神々などを模した偶像や儀式等は、「気づき」の範囲が容易に広がるための計算補助用具のような役割を担っていたと思われる。気づき(認識)の範囲が広がることと比例して、仏教では慈悲の心、キリスト教では愛の範囲も広がる、というように解釈ができる。



「永遠の哲学」を参考にすれば、前・近代までは、人の知覚形式は上図のような知覚認識であったが、近代に入り、この知覚認識に3~4に分化(差異化)した(下図参照)。



ウィルバーは、これらを

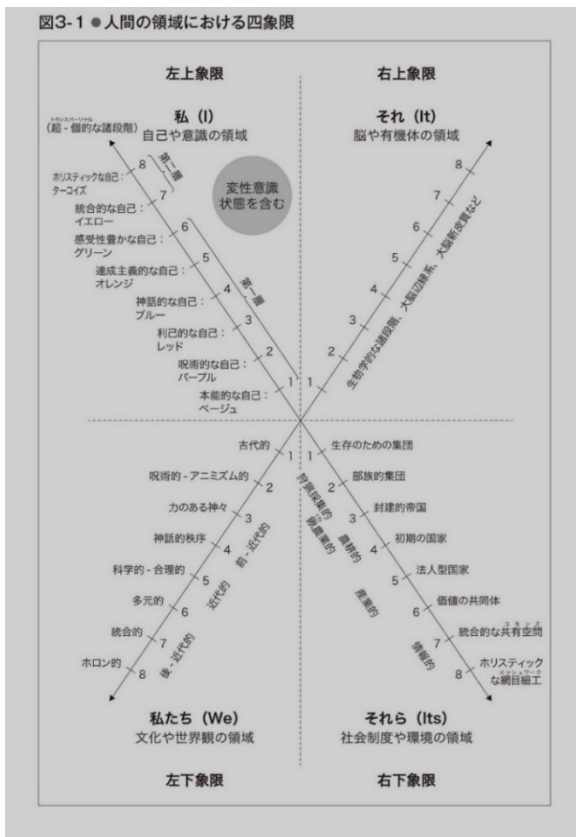
・真(客観性重視の物質領域(its))と・生命科学領域(it)の、さらに2つに分けられる右側

の第2・4領域)

- ・美 (個人的主観による、芸術文学などの左上の第1領域)
- ・善 (文化・宗教などの集団の内面に関する左下の第3領域)

に差異化されたと考える。これを4象限と呼び、以下のように図式化した。

<人間の領域における四象限>



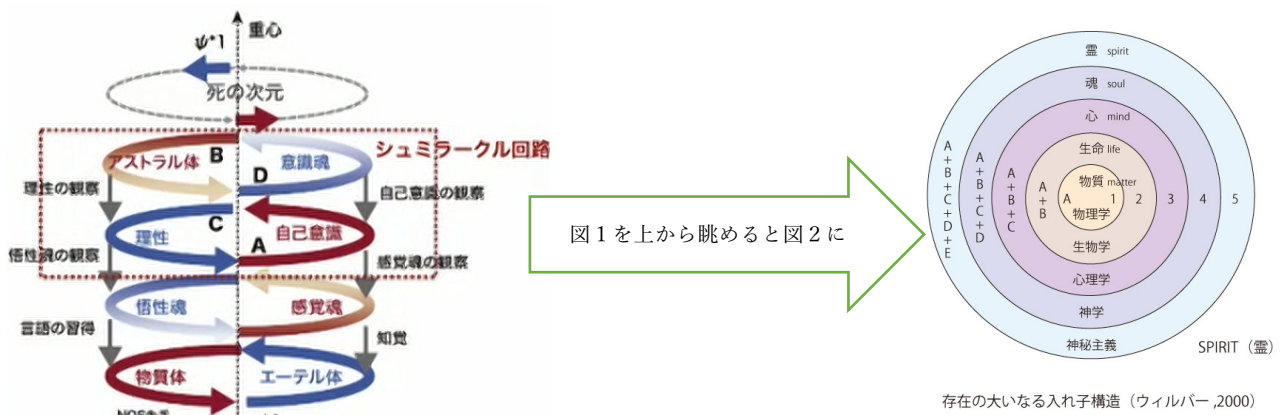
近代以前、<真・善・美>という、これまですべての領域が一緒くたに解釈されることで、様々な問題が起こっていたが、近代に入り、これらが差異化されることによって、それぞれ住み分けが起こった。

例えば、古代的・呪術的慣習は変わっていく。神に子どもを生贄にしなくても雨は降ると考えるようになり、地動説を唱えても宗教裁判にかけられなくなった。菌やウイルスの存在が理解され、病は悪魔や呪いのせいではなくなった。そうしてファシズム的、カルト的な宗教やその教祖は無くなる傾向に進んだ。こうした背景から、科学技術はのびのびと進化できるようになった。これは近代の素晴らしい側面だとして解釈できると思われる。しかし、物質科学の唯物論的解釈で上図、四象限の左側の意識や心、文化、宗教、芸術などといった象限をすべて、右側の客観世界である数字や統計などの幅的世界観で解釈してしまおうという強烈な流れが起こる。この流れから、美や善の領域は平板な数値として還元されてしまう。ウィルバーは、これをフラットランド (平板な世界) と呼び強く批判する。

後 - 近代という今現在においても、この傾向はより増長しているという。また IT 革命はこの傾向を加速させた。この近代の偏りを、ニューソロジーでは人間型ゲシュタルトと呼んでいる現象であると考える。

8. ニューソロジーにおける空間構造

ニューソロジーでも重心 (0) / 「気づき」を中心軸として、発達とともに、認識の範囲が広がっていることを示している。図 1 から、上の軸を情報空間の抽象度としてみると、重心を軸に時代を経るごとに空間認識の範囲が広がり、次元観察子が顕在化していく過程としても見える。



< 図 1 >

< 図 2 >

< 図 1 > のニューソロジーの空間構造を上から眺めると、< 図 2 > の「存在の大きい入れ子」の構造と対応しているように見える。

生命は進化を経るごとに物理空間から情報空間にまでその認識の範囲を広げるに至ることで、文明を発達させた。この場合の情報空間とは持続空間と同義のものと考えてよいだろう。情報空間でのやり取りを容易にするために、言語はこれに大きな影響を与えている。

9. 解釈によって変わる表相の意味

進化・発達を経るごとに、表相の解釈の範囲は広がったが、現代は近代的な解釈に大きく傾いている。例えばリップルマークは近代以前は、山の崖に出来た神秘的な波紋模様として見えていただろう。それを古代人は「神の指紋」と解釈し、畏怖の念を感じていたかもしれない。しかし近代以降の科学の知識によって、それは地球の何億年前の地殻変動というドラマが織りなした模様であるという、意味付けがまったく違う世界観になることとなった。そこには壮大な時空の地球の物語をイメージし、感動するかもしれない。しかし、「神の指紋」という呪術的な解釈と畏怖の念はない。代わりに観光地を含めた利便性のある資源に使えないかという合理的な思考解釈をする者もいるかもしれない。この様に、其々の人が持つゲシュタルト (認識の地図) により、現象の解釈とそれに伴う世界観と物語が全く異なる。

人間型ゲシュタルトにおいて、「私」という解釈では、自己は他我化され、広大な宇宙の中の孤独な生き物としてしか解釈されない。こうした認識を起点とした生活や思考、行動が愛着障害を生み出す社会を形成し、さらに愛着障害の回避型愛着障害がより増加する背景になっている。

この認識の根底の背景には、人間型ゲシュタルトによる世界観がある。それは、無意味な素粒子が何故か突然偶然にも集まり、原子、細胞、動物…という具合に発達し人間を生み出したという、泥から生命が誕生したという解釈だ。こうした観点から考えると、万物の起点でもあるとされる素粒子の解釈は人間型ゲシュタルトを決定づけている大きな要因であると思われる。この素粒子の解釈を持続／霊の領域から解釈すると、人間型ゲシュタルトの導き出す「私」と KOSMOS（ウィルバーは、観察可能な客観的な面のみならず、意識という主観的な面も含む世界を、宇宙(universe, cosmos)ではなくコスモス(Kosmos)と表現する) の関係性は全く反転する。

10. 主観空間はヌーソロジーでは、素粒子そのもの。それは生命感覚であり、生命素粒子／気のこと。

素粒子は人間型ゲシュタルトでは、KOSMOS の最小単位として解釈する。一方ヌーソロジーでは、素粒子は主観空間そのものであり、人の主観空間の中に広大な宇宙および KOSMOS のすべてが射影し、入り込んでいると主張する。そして $\psi 3, 4$ の主観空間は、ヌーソロジーとシュタイナーの理論的な対応を考察すると、生命感覚に対応する。

一方、苦米地の超情報場仮説と生命素粒子理論（※注1に詳細有り）においては、情報の最小構成単位が生命素粒子である。ヌーソロジーにおいても、 $\psi 3$ は最小精神と言われることと、生命素粒子は情報の最小構成単位であるという定義と関連性があるように考える。生命素粒子は、気功での「気」であり、ヴェーダでの生命エネルギーであるプラナ、エーテルという概念の認知科学的な用語であるといつてよい。先に述べたシュタイナーの生命感覚そのものであると解釈できる。

この生命素粒子（気）には良いも悪いもない。水を例えに考えると、水の中に毒が入っていたら毒水になり、栄養を入れたら病を治す薬ともなる。水とはあくまで H_2O であることと同じであるように、生命素粒子である主観空間はただのエネルギーである。

主観空間である最小精神は「気」そのものである。それは情報が微分化されてあらわれる最小単位だ。それがどのように組み合わさるか、つまりこの場合の「積分」とは、どのようなゲシュタルトで解釈されるか、ということになるだろう。つまり「気」でもある最小精神は、思考ゲシュタルトによる解釈で、毒にでも薬にでもなる。

例えばミュージシャンのジャスティンビーバーがある日、旭日旗のマークが付いたジャンパーを着て SNS に映った。ジャスティンにとっては自分の趣味として着ていただけだったが、アジアのある国々は、その写真について大炎上を起こした。主観空間にある旭日旗のマークのジャンパーは良いも悪いもない。旭日旗のマークを思形(ψ9.10)や近代(ψ11.12)がどのように解釈するかで、表現される感情と行動が異なる。ジャスティンは気に入って無邪気に旭日旗のジャンパーを羽織った。逆にある一部のアジアの国々の人々はそうは解釈しなかった。それに敵意を感じ、は怒りと憎しみを表現し争いに発展した。

これと同様なことが神経発達障害の概念にも言える。日本では、アスペルガーと診断されると、集団に適応できないと悲観や不安感を持たれる保護者のケースが圧倒的に多いように感じる。対して欧米では天才が生まれたと喜ぶ地域もあるという。前者と後者間で育つ子どものモチベーションの差は想像に難くない。

11. 気/生命素粒子

気功では、先天の気、後天の気、秘伝の気がある。先天の気は母親から子どもに一生をかけて分け与える気。後天の気は、太陽エネルギーを取り込んだ食べ物からの気である。ここまでは物理空間での気の話である。これらに対し、情報空間の気を秘伝の気という。情報空間は、ここでは持続空間のことを指す。つまり言い換えると、持続空間はエネルギーを持っており、抽象度が高ければ高いほど、その潜在エネルギーも大きい。

例えば虐待や災害による PTSD の記憶で、コルチゾールというストレスホルモンが生成され、これが海馬を損傷し、記憶障害に陥らせ、物理脳の扁桃核に傷が入り、その関連する場所に癌細胞ができるという話を前項で書いた。また、アームチェア・ビクティムという現象として知られるが、TVなどのメディア媒体からでの情報でも同様の効果がある。例えば、被災現場から遠く離れた安全な場所で過ごしていても、ずっとTVから被災地の情報をみていると、現地の被災者と同じ PTSD を患うことがある。

これは情報(PTSDの記憶)が時空を関係せずに物理身体に影響を及ぼしたという事例である。こうしたエントロピーが下がる例だけではなく、反対にネグエントロピーの例も沢山ある。例えば、試験結果での合格という「情報」を得ることで、その個人は不安と緊張から、安心と安全、希望というセロトニン、ドーパミンが出て健康的になる。母親や恋人から抱擁され、励ましや愛情のある声掛けを受けるといった情報は、その個人に愛情ホルモンであるオキシトシンが生成され、物理身体の免疫系が強化される。こうした例は枚挙にいとまがない。

これらは情報が身体という物理情報に影響を、良いも悪いも与えているという例である。

人間型ゲシュタルトは、物理空間のみの唯物的世界観なので、秘伝の気が心理的盲点（スコトーマ）となって見えない。秘伝功などの現象は、人間型ゲシュタルトから見ると、怪しいオカルトや時によっては嘲笑の対処となって無視される理由であると考える。

また、先天的な気質や感覚で秘伝気功の認識できる人間がいても、その個人や取り巻く周囲の人々のゲシュタルトが人間型ゲシュタルトであればカルト・セクトと化し、様々な事件に発展しさえもする。こうしてますます社会では霊性が危険で愚かなカルト的のものとして隅に追いやられることになる。

主観空間では、人は人間型ゲシュタルトによる解釈と変換人型ゲシュタルトの解釈を往行している。そして、人間型ゲシュタルトでは認識できないが、情報空間の中で情報（記憶）が往行することによって、抽象化と等化と繰り返し、変容していく。こうして抽象度の位置エネルギーも増していく。こうしてあるきっかけでこれらが物理次元に写像し、時空 M が変化していく。

また、最小精神である主観空間は、思形・感性・近代と（ $\psi 9 \sim 12$ ）によって積分されることで、様々な色と形に変わる。この色と形はインテグラル理論における、インテグラル理論の柱ともなっているスパイラルダイナミクスを参照されたい（※注2に詳細を記す）。水（ H_2O ）が毒にも薬にもなる例と同じだ。主観空間が思形や近代によって、様々な彩られる。これが宗教や思想の凝集性や対立として現象化されていると思われる。

いくら生命エネルギーが充実する働きを行っても、この思形・感性・近代と（ $\psi 9 \sim 12$ ）のゲシュタルトが変わらなければ、物質次元での輪廻を人間は繰り返す。例えば、ナチは霊的伝統の修行であるヨーガや瞑想に長けていたことで有名だ。この事例は思考のゲシュタルトの重要性を示している事例であると考える。

1.1. 対称性通信と発明

京都大学数理解析研究所の望月新一教授が未解決の数学的難問「abc予想」を解決できるとする「IUT理論（宇宙際タイヒミュラー理論）」を提唱した。この場合の宇宙とは様々な数学宇宙の場である。IUT理論は未だ論争中にあるものの、この理論の要である「対称性通信」とは、「相似形のものとは直接繋がりがなくても影響を及ぼすことができる」（8）（9）というものだという。

これは、持続空間の中の現象であれば誰しもが経験している現象のように思える。

例えば、ライト兄弟やレオナルド・ダ・ビンチとジョージ・ケイリーはタカや鳶の羽ばたきなど取りを観察、研究することで人類が飛行することを可能にした。彼らの持続空間の中

で、鳥の構造などを、文字通り様々に持続空間の中で「回転」させ、そこに働いている本質的なメカニズムが発見される。これは抽象化と等化の現象である。

ジョージ・ケイリーは、少年の頃から鳥の飛翔に強い興味と関心を抱き、鳥たちを見上げては、そのメカニズムを考え続けた。ある日、斜め上方向から風を受けて鳥が上昇飛行するのを見たとき、鳥の羽に生じる力を上に押し上げる力（揚力）と前に押し進める力（推力）に分離するという画期的な着想を得、空力学として等化された。その等化された理論から様々な実験が行われ、物理次元に飛行機として現象化される。これは空を飛行する鳥の情報宇宙と、飛べない人間という情報宇宙が、発明家達の持続空間の中で対処性通信が行われ、等化され、中和として飛行機が現象化されたともいえる。

ライト兄弟やレオナルド・ダ・ビンチとジョージ・ケイリーは当時の一般の人間型ゲシュタルトからすれば異端であった。しかし彼ら人間型ゲシュタルトの幅的な価値観での評価よりも「奥行き」の意識で抽象度の階段を上がる（等化の連続過程）ことで人間型ゲシュタルトが創る常識的な領域から外れることができたと考える。

こうした発明は抽象度の高い位置エネルギーが、低い物理次元に落ちてきたとも表現できる。始まりは人の精神の中で、試行錯誤の内に抽象化・等化が繰り返され、ついには飛行機的设计図が見出される。その設計図は、物理次元の紙の上に描かれる。そうなる物理次元が書き換わることが起きる。つまり実際に人間が「飛行機」を製造することで人間社会は大きく活動と意識の幅を広げる。

しかし大多数の人間型ゲシュタルトの割合が多いので、人間型ゲシュタルトのコンフォートゾーン（情報空間での恒常性維持機能のこと。快適な情報空間を人間は望む。「出る杭は打たれる」などの現象がこれに当たる。）の法則により、現状を維持する力が働く。この動因は唯物主義であり、広大な宇宙に広がるちっぽけなあわれな「私」という分離した不快感である。この解消を求め、対立、支配という欲求から主観空間にある飛行機を単に空飛ぶ素敵な道具としてだけではなく、兵器として解釈し、使用する。

人類史を跳躍させる様々な発明が持続空間で発見されるが、それを応用するのは常に文明の中で権力を扱う人間型ゲシュタルトであったために、戦争という物語が絶えることがない。人間型ゲシュタルトの科学の能力はこの100年で急激に進歩し、核分裂の原理まで発見するに至り、その中和作用として原子爆弾の発明と長崎・広島という物語が生まれる。さらにAIの発明により、人間型ゲシュタルトは全て数値化されたデータへと変換するという流れで社会を飲み込む。こうした人間の行先は「死の社会」と述べ、その兆候として、増加する回避型愛着障害の人々の増加であると岡田(2019)は主張する。

12. 往行する記憶

ヌーソロジーでは、空間は無限の次元が重畳したレイヤー構造のようにして活動している。空間は記憶であり、単独で存在せず縁起的に様々な情報とつながっている。また、記憶は反芻することで、対称性通信でレイヤー構造の宇宙同士で通信する。この場合の宇宙とは様々な情報宇宙との関係性のことであり、そのきっかけは親子関係、学校関係、職場関係、地域関係のやり取りから、SNSでの交友関係、小説や映画、TV、などのメディア媒体、音楽や絵画などの情報宇宙とも通信し合う。

こうしてひらめきや洞察が生まれ、主観空間の中に物理的な出来事として現象化し、文明が発展する。記憶が時空を超え人と人之間を、様々な宇宙（数学宇宙、音楽宇宙、文学宇宙、神学宇宙、物理宇宙・・・等）を超越しながら往行することで様々な出来事が生まれる。例えば、聖書の2000年前の物語が現代人の人生を駆り立て、個という持続／記憶を超えた様々な文化・宗教に基づく、テロや戦争、偉大な発見、発明など破壊的なものから創造的なものまでの重大な出来事を作り出し続け、次世代にも巡り続けていることにも表れている。

13. 回避型愛着障害がと様々な問題が増える背景

人間型ゲシュタルトから生じた他我化は世代を追うごとに反芻し、凝縮され色濃くなっていく。育てられるべき神経系は育たず、脳内には愛着形成で生成されるはずのオキシトシン系のホルモンが生成されない。他我化した物差しで、どれくらい社会的に成功したか、学歴はどうか、競争に打ち勝ったか、という尺度的な物差しで得られる報酬系ホルモンはドーパミン系であるが、これは条件付けの愛情である。養育者（母）と子の愛着形成は無条件で行われるが、こうした場合だと何らかの条件を満たさなければ自分は愛されないと脳は解釈する。

こうした子育ての中で、親子関係は悪化しながらどんどんずれ続ける。親は子どもとの愛着形成に疲弊と不快を感じ、面倒臭くなる。こうして回避型愛着障害ができる。回避型愛着障害の傾向は、生きる意味が分からず、無条件に愛された際に放出されるオキシトシン系のホルモンが少ない。そのため安心、安全、愛情という感覚が育ちづらい為、さらなる刺激を枯渇することになる。生きる意味と価値が実感できずに自己破壊的な行為から生きることを実感し、他者を支配し、蹂躪することで生きる意味と自身の存在価値を体感する方向性に向かう。これがいじめ、虐待、DV、鬱、様々な精神疾患、自殺の根底流れている動因であると考えられる。

そして次に人間の価値を幅化してみるあまり、自分よりヒエラルキーの下と見えるものや、

ヒエラルキー社会の下層にあるものについての人権を感じなくなる。こうした傾向が偏りすぎると、持続空間の中で反社会的な情報が往行し、あるときに閾値を超え、人を通してこのエネルギーが表現される。これが時折起きる凶悪犯罪や事件へと繋がっていることにも想像に難くない。

こうした動因は、他我化したプログラミングのなれの果てであり、哲学的ゾンビの状態である。行動原理は不安や恐怖、虚無という情動がベースの抽象度の低い思考状態だ。虐待、差別、粛清といった記憶は対称性通信を行い、人間の持続空間の中をオウコウ（行き交う。オコット情報より）することで、現象化され続ける。これが世代間連鎖となり、仏教での輪廻転生の核ではないかと考える。

持続空間の中で記憶は様々な宇宙を往行しながら、抽象化と等化を繰り返す。それは人の中で様々なひらめきや発明という出来事となり、物理次元に現象化される。この動因が人間型ゲシュタルトの不安や恐怖であれば、エントロピーの法則に従い、個人のレベルでは心身の障害と病として表現され、破壊や分離をもたらす社会現象や人間関係として現象化される。

しかし、変換人型ゲシュタルトは人間型ゲシュタルトとは真逆で反転している。それは人間型ゲシュタルトとは異なる動因であるとすれば、ネゲントロピーの作用が生じ、治癒や成長につながり、絆が創造される社会が現象化されることが推測される。そして、これまで人間型ゲシュタルトでは見えていなかった現象や、奇跡や偶然として片付けられていた現象が、変換人型ゲシュタルトの視点では、整合性と再現性を以て解釈されるだろう。

こうした事例を集め、解釈し、研究することによって、人間型ゲシュタルトから変換人型ゲシュタルトへの移行が速やかになると考える。

参考

- (1) ケン・ウィルバー 「インテグラル・スピリチュアリティ」(2008) 春秋社 317
- (2) ケン・ウィルバー 「インテグラル理論」(2019) JMA 176
- (3) フランク・キンズロー「瞬間ヒーリング QEのすべて」(2023) ナチュラルスピリット
- (4) 苦米地英人「空を定義する」(2011)
- (5) ケン・ウィルバー 「インテグラル理論」(2019) JMA 240
- (6) ケン・ウィルバー 「インテグラル理論を体感する」(2020) JMA 240
- (7) ケン・ウィルバー 「インテグラル理論」(2019) JMA 123
- (8)(9) 大野 靖志「ギャラクシー・コード」(2021) サンマーク出版・加藤 文元「宇宙と宇宙をつなぐ数学」(2023) KADOKAWA

(10) 岡田 尊司「ネオサピエンス」(2019) 文藝春秋

— 備考 —

※注1) ・ 苦米地理論－CH 理論、超情報場仮説、生命素粒子理論－

苦米地は自身の研究を進めていく中で、人間の認知の解明を行う過程で自身の仮説を構築し、応用している。その分野は宗教、哲学、数学、物理学など多岐にわたる。苦米地の仮説は、「サイバーホメオスタシス (CH) 仮説」、「超情報場仮説」、「生命素粒子仮説」というように発展、展開している。

これらの仮説は「私たちの認識している空間は、関係性からなる情報空間である。情報空間は階層をもち、その情報の最小構成単位は生命素粒子と呼ばれるユニットで構成される。情報空間の階層性は、抽象度の高い領域から低い領域にまで連続体で存在し、抽象度の最も低い領域が物理空間として写像された空間で、最も高い領域は「空」という領域になる。そして、情報空間にも位置エネルギーが存在し、抽象度が高ければ高いほど、潜在している情報空間の位置エネルギーも大きくなる。」という。

そして時間は存在せず、過去も未来も同時に存在します。時間の流れとして感じる方向性は、人間の認識フレーム (ゲシュタルト) 次第で、過去から未来に流れるように見えたり逆に未来から過去に流れるように見えたりする、と考える。そしてこの宇宙は、私たちが進化した先の知性が、個々の存在一人一人が場を共有するためとして物理空間を創ったと主張する。ここでは、苦米地の3つの主要な仮説について、簡単に見ていきたい。

1. 「サイバーホメオスタシス (CH) 仮説」

苦米地のいう「サイバーホメオスタシス (CH) 仮説」とは、「人間は進化により物理空間のみならず情報空間に対してもホメオスタシスを働かせることができるようになった。よって人間は仮想現実にも臨場感 (リアリティ) を持つことができる」というものである。

例えば外気温がどれほど暑くても、体温が60度になったりはしない。汗をかきながらその汗が気化する過程で身体から気化熱を奪い、体温の恒常性を維持しようとするからである。逆にいくら寒くても、身体の体温も一緒に氷点下になったりしない。筋肉が震えて熱を生み出し、体温の恒常性を維持しようとする。こうした機能はホメオスタシスといい、恒常性維持機能のことを言う。

恒常性維持機能は物理空間だけではなく、情報空間にも広がっている。目の前にあるわけではなく、未来の推論であったり、過去の記憶にもかかわらず手に汗を握ったりする。これはホメオスタシスが情報空間に広がっていることを意味する。

2. 「超情報場仮説」

超情報場仮説において、この世は存在と存在の関係性で構築される情報空間で、そのもっとも抽象度の低い領域が物理空間に当たり、もっとも抽象度が高い領域が「空」ということになる。そして、抽象度が高ければ高いほど、抽象度の位置エネルギーが存在することになっている。「超情報場仮説」を平たく言えば、情報空間が存在するということであり、物理空間は情報空間に含まれる。情報空間の因果が物理空間に写像される。

3. 「生命素粒子仮説—生命素粒子と気、プラーナそしてエーテル」

生命素粒子仮説とは「物理空間に最小単位があるように、情報空間にも最小単位がある」というのが生命素粒子仮説である。その生命素粒子が原子のような粒として存在し、その粒が勝手に動く。素粒子が集まって、自分の肉体や世界の物理的側面を構成しているように、生命素粒子が集まって情報空間を作り上げる。生命素粒子の基本的な性質として①動的、②自律的、③分散的、④協調的に動く。

生命素粒子は動的・自律的・分散的・協調的に動きながら、構造化していき、抽象度の階段を上がり、ある時点から知的にふるまっているように見える。

生命素粒子は、私たちの親しみのある日常用語から考えると「気」と同じものである。そしてそれは、インド哲学でいうところのプラーナ、気功の「気」と同じ概念である。またそれはシュタイナーのいうエーテルという概念にも対応する。

参考

苔米地英人 「夢が勝手に叶う手帳」 2023

苔米地ワークス DVD 生命素粒子理論 2017

※注2) スパイラルダイナミクス理論はインテグラル理論の支柱の一つである。これは、ホロニックに展開する8つの意識の発達段階表である。テーブルに表示されている各思考の出現時期も鑑みて、第1思考から第4思考までは、思形($\psi 9$)に対応し、第5～第6思考までは近代以降に対応すると考える。

また、最初の6つの段階を第1層の段階を名付けられている。それ以降の段階を第二層の段

階と名付けている。第1層は欠乏欲求に根差し、第2層は存在欲求に起因する。

クレア・W・グレイブス教授/8つの意識の発達段階

	サバイバル	部族	英雄	絶対主義	個人主義	ヒューマニスト	統合	ホリスティック
	Beige	purple	Red	Blue	Orange	Green	Yellow	Turquoise
人口	1%	1%	5%	30%	40%	15%	5%	1%
出現した時期	10万年前	4万年前	1万年前	5000年前	1700年	1900年	1950年	1970
マズロー段階欲求	生理学的、本能的	安全・安心	愛と帰属	承認	尊厳	本物	自己実現	自己超越
人生のテーマ	生き残るため	部族の安全と幸せ シャーマニズム 神や崇りを飾れる 魔術が信じられている 儀式、禁忌、迷信 民間伝承	望むものを手に入れる 自己中心的 略奪・搾取 衝動的な自己表現 服従への拒絶	絶対的な原理に基づく 行動規範を通じ 平和を求める 強力な権力構造 今を犠牲にして 将来の報酬を得る	利益のために規則を コントロールする 物質主義 成功戦略 ステータス	人類、コミュニティと の密接な繋がり 家族意識 平等な関係性 一体感、共同意識	持続可能性 利益は目的ではない 柔軟性、自発性、機能 性を求める システム、価値感 知識、競争力の統合	すべての存在との 繋がり 調和、神秘的な力 覚醒、悟り
人生のゴール	食べ物を見つける 生理的な満足	精霊を喜ばせる 部族の伝統を守る 確実な存続	伝統からの逃避 力と栄光、名誉	ルールに従うことで平 和を手に入れる	戦略的に成功を 勝ち取る	平等主義 感情の共有 多様性のある 社会の実現	お互いの違いを認め いかに統合できるか	宇宙意識
メタファー	人生はサバイバル	人生は犠牲	人生は戦い	人生は試験	人生はゲーム 世界は機械	人類は家族	人生はシステム	人生は夢
コアバリュー	サバイバル	安全、伝統	パワー、強さ	修養、権威、目的	達成、権力、利益	平等性、正直、関係性	統合性、適格性	体験、謙遜、崇敬
例	新生児、痴呆老人	原始的な部族 シャーマン	英雄、ギャング カルト、過激派	カトリック教会、宗教 的原理主義、政府省庁	ウォール街 資本主義、会社組織	ジョン・レノン、 グリーンピース、 カナダ・オランダの 医療システム		

Memes of Clare W Graves

(※図は、株式会社マイルストーンデザイン Hp より転載)

第1層は視野が狭く、排他的で互いに孤立しており、その動機は主に不足や欠乏の感覚である。人間型ゲシュタルトに対応すると考える。

これに対し、第2層は包括的で、インクルーシブで、統合的であり、豊かさや充足の感覚に基づいている。歴史上この様な意識が大規模に出現したことは一度もない。現在でもこうした意識は珍しい。これは変換人型ゲシュタルトに対応していると思われる。

参考

ケン・ウィルバー 「インテグラル・心理学」 2021

神の再解釈

ヌーソロジーから、
インテグラル理論と生命素粒子理論をかけ橋として、
愛着障害・神経発達障害を考察する

河野 宗太郎

IV 変換人型ゲシュタルトによって素粒子の解釈を反転させることで様々な事例と現象を再解釈する

【要約】

人間型ゲシュタルトは一般的に言われる世の中の常識と呼ばれるものと考えられる。それは唯物領域しか見えないために、それ以外の領域がスコトーマ（心理的盲点）になり見えない。自身を客観空間のなかの身体に入り込んでいると認識しているので、この脳の目的は身体の維持、生き残りを最優先とするように設定されてしまう。これが人間型ゲシュタルトの共通する世界観になる。一方で、主観空間が素粒子であると顕在化された場合、つまり変換人型ゲシュタルトにおいては、人間型ゲシュタルトでは解釈できなかった事例が理解できることが考えられる。人間型ゲシュタルトにおけるスコトーマ（心理的盲点）が外れているからだ。つまり、変換人型ゲシュタルトでは、人間型ゲシュタルトでは見えなかったことが見えてくると考える。ここにおいて「私」という自己存在は、頭蓋骨に収まった範囲の脳細胞の中の電気信号のやりとりのパターンという認識ではなくなる。物理空間と情報空間が連続していることが認識されているので、脳と心が連続的に繋がっているということになる（超情報場仮説より）。「脳と心」は同じもので、この観点であれば、目の前の空間が自分の脳の一部でもあるということが言える。本稿では、こうした背景に立って、いくつかの事例と現象について考察した。本稿は5つの連作の内の四つ目にあたる。

1. ヴィクトール・E・フランクルは、なぜ生き延びることができたのか

アウシュビッツという過酷な収容所生活の中、最終的に生き残った人々の共通することは体格や体力、栄養状態の影響は関係なく『希望を持ち続けた人』が生き残ったという。精神科医&心理学者のヴィクトール・フランクルは、そんな生き残りの中の一人であった。彼は収容所の中で愛する妻との幸せな日々を反芻していたという(1)。そんなフランクルは、強制収容所から生き延びることが出来た。彼は、その理由の一つに『未来に対する希望(ヴ

イジョン)を捨てなかったから』と述べている。

フランクルの夢とは『未来の自分がこの収容所生活の中で得たものや気付いたことを聴衆の前で講演している』ということであったという。人間型ゲシュタルトでは、殆どの人々が虐殺されていく有様を見て、合理的に自身が生き残る確率を計算し、絶望するだろう。しかしフランクルのように、現状の状況に自身を適合させ、比較するよりも、持続空間の中で自分自身の理想とするイマジナリーの世界を維持し続けた。それができたのは、フランクルと愛する妻との幸せな日々の記憶の反芻が基礎になっていたと思われる (1)。それはフランクルの母や、妻との愛着形成が基盤となり、その記憶がフランクルの持続空間の中で回転を重ねることで情報空間の中の抽象度の階段を上がっていく。

これは秘伝功の気を錬っていく行為と同じようにも考えられる。フランクルの生命エネルギーは気を錬るごとに上昇する。抽象度の位置エネルギーは増加し、フランクルの見ていた夢は、人類の気づきを与えるという壮大な夢となっていく。フランクルの身体レベルではセロトニン、ドーパミン、オキシトシンが生成され、治癒と免疫力が強化されると思われる。

超情報場仮説において抽象度の階梯は、個人<家族<地域<世界<生命という具合に高くなり、高いほど位置エネルギーが潜在化する。そのエネルギーは様々な縁起のネットワークと繋がり、物理次元に写像され実現化する。この様な背景からフランクルは収容所で生き残ることが出来たと思われる。そしてフランクルは、人類の大きな気づきに繋がる講演を行い書籍を出版する。フランクルの精神の中で抽象化し、等化された思いは「夜と霧」という著書として世界的ベストセラーという形で現象化し、彼のメッセージは時間を超えて人々に大きな気づきと希望を与え続けている。

人間型ゲシュタルトでは、フランクルは偶然運良くも生き残り、その突出した才能でロゴセラピーという心理療法を開発し、「夜と霧」というベストセラーを書いたという、良くも悪くも素朴な解釈になる可能性がある。しかし変換人型ゲシュタルトの解釈では、それは偶然ではなく必然の法則として解釈されるのではなかろうか。

この事例は、しばしばコーチングの理論を説明される際に用いられる。コーチングでは、現状(この場合、人間型ゲシュタルト)を超えた、抽象度の高いゴール(夢)を持つことで、抽象度の位置エネルギーが現状を壊し、現状を変えていくという解釈である。

2. 透視のようなプロファイリングと脱洗脳

苫米地博士は、脱洗脳のテクニックを用いて、殺人事件プロファイリングを行い、実際に警察の捜査に協力してきた。その手法は「ホメオスタシス同調効果」と呼ばれるものである。このアプローチは、自身の自我をなくすことで、心理的盲点(スコトーマ)がなくなること

から始まる。

苦米地は殺人事件の現場で、一度釈迦のようになって自我をなくすことで全情報が見える(2)という。すると捜査側の視点も、犯人の視点もわかり、目の前に立体的な絵として見える。その際に殺人者の快樂は感じていないし、被害者の苦しみも感じない。その時の空間そのものに同調しているという。時空間を隔てて起きた臨場感空間に苦米地博士が同調するから、三次元立体3D映画の中に入って、あたかも目の前に犯罪が起きているかのように見えるという(2)。

こうした現象は、人間型ゲシュタルトではオカルト扱いであると解釈されるだろう。また、苦米地はオウム真理教信者の記憶を操作し、信者の目の前でオウム真理教の教祖をゴキブリに変え潰すヴィジョンを見せ、洗脳を解いている(3)。何らかの方法で、他者の主観空間を乗っ取り操作しているということになる。記憶(持続/霊性)に関する操作技術と言える。

3. 気功の遠隔施術

気功では、主観空間にいるクライアントに気を流すことで、病や障害の治癒を行う医療気功がある。クライアントのエネルギー場に働きかけ、秘伝の気を流す。クライアントが目の前にいれば催眠やプラセボだという解釈が人間型ゲシュタルトは解釈する。そして催眠やプラセボで解釈できない現象が遠隔施術である。実際クライアントが、施術者が地球の裏側にいても効果は変わらないとされる。その際に必要なものは、クライアントの写真や名前、生活する場所、クライアントの症状ぐらいの情報だけでよい。施術者それらの情報を基に、持続空間でクライアントに同調し(ホメオスタシス同調効果)、気を流す。そしてクライアントの状況や症状が施術者には見えたり感じたりすることができる。そして気を流し、クライアントに治癒が起こる(4)(5)。

人間型ゲシュタルトでは、気功はオカルトや気のせい、プラセボと解釈して終わってしまう可能性がある。遠隔治療を含む気功施術がこの近代医学が発展した世の中でもいまだに受け継がれ、多くの人に利用されているのは、単なるプラセボ効果のみとして解釈するには無理がある。

実際著者も何度も遠隔治療を受けていて、何度歯医者に行っても治らなかった、歯ぎしりによって起きた歯根膜炎が2~3回の遠隔施術で治っている。気功でのこうした事例を出せばきりがないだろう。しかし、当然気功が万能というわけではないことも明記しておく。

4. 強迫神経症を患う青年の症状を重心(0)の力で改善する

著者が医療機関でカウンセラーを行っていた際に、強迫性障害で仕事ができなくなっ

まい、長期的に仕事を休まざるを得ないクライアントの担当を受け持った機会があった。クライアントは、幼いころから、自身の欲求を抑圧し家庭の調整役を続けていた。自分が完璧にその調整役を行うことで、家庭の平和が保たれるという思いでいたという。

ある日そのクライアントが、自分が以前にネットショッピングをした際に、必要以上の買い物をしてしまったのではないかという恐怖に陥り、何度もスマホを確認した。確認しても無駄な買い物はしていないことがわかるが、1時間もしないうちに何度も同じ確認をしないと気が済まなくなった。そのうちに何時間も確認作業を行ってしまうようになる。さらに、朝の出勤途中に「先ほどにすれ違った子供を自分は殺してしまったのではないか」、という奇妙な考えに取りつかれた。クライアントは確認をしなければという強迫的な気持ちが強まった。そして出勤に遅れてでも来た道に戻って確認を行った。こうした症状が毎日頻発してしまったので、仕事ができなくなった。その後、仕事を退職し、クリニックにカウンセリング治療を行うことになった。

私はまずセラピストとして、ストレスマネジメントを行った。また、母親との関係性が大きな影響を与えていることがわかり、何度か母子ともにカウンセリングを行っている。本人は投薬治療も並行して行っていた。そのような中、本人の症状が殆ど気にならなくなったのは、QEというヒーリング技法であった(6)。QEは、触覚からの気づきをもとに治癒を行う技法だ。QEは数分で終わり、ごく簡単にできる。

クライアントが強迫的なネガティブ思考によって、扁桃核が疲弊しマイクロサイズの傷があると仮定すれば、重心(0)の「気づき/統一場」とどまることで、ネゲントロピーの力が作用し、扁桃核の治癒が起こることが推測される。実際QEの技法を行っているときは深いリラックス状態になる。それに伴って自然治癒が進み、症状が軽減する。もちろん治癒が促進するための環境調整や生活習慣も改善する働きかけも行った。

これに加え、ホールネスワークという技法を行った(7)。ホールネスワークは開発者が様々な霊的伝統の癒しの技法を研究する過程で開発したものだ。これは、クライアントの複素ヘルベルト空間(8)において、不安や恐怖をベースにした強迫観念が生起する際に身体感覚に気づいてもらう。そこからその不快な感覚を五感で捉える。例えば、その不快な感覚がどんな温度や硬さ、色、形、大きさをしているかというように、対象化して「気づいて」もらう。次いで、その不快な感覚の情報を「させているもの」についても五感で把握してもらう。その不快な感覚はホロニック的に存在している。こうした探索を2~3回行い、持続空間の中でその不快な情報を解いていくという技法である。

最初は毎週通っていたクライアントであったが、やがて隔週、月一、不定期のペースになった。数か月後の全5~6回ほどのセッションでは殆どの症状が軽減していた。クライアン

ト自身がこれらの技法に関心を持ち、家庭で熱心にワークに取り組んでいたことが功を奏したと言える（事例については個人が特定されないようにいくつかの事例を組み合わせ、変えて表記している）。QE もホールネスワークも、霊性である重心（0）をベースにした技法に基づいている。

5. 「いじめ」とう現象についての考察

愛着障害は、人間型ゲシュタルトによる産物であるとする、変換人型ゲシュタルトが社会の共通認識になっていけば、愛着障害は解消していくだろう。つまりそれは文明の価値観の方向転換ということになる。これほど大きな方向転換は、子どもから始めなければならぬだろう。当然それに伴って、その子どもを育てる大人の価値観も方向転換を迫られる。

子どもの世界の数ある多くの問題の中に、いつの時代もいじめが大きな問題になっている。この問題は、当然子どもを育てる大人と社会が大きく関与しているが、あまり認識されない場合がある。この問題の解釈と解決は、非常に重要であるが決定的な突破口には至っていないと思われる。

ここで、本稿ではこれまでの持続空間からの観点で教育、いじめについて考察してみたい。

・主観空間である生命素粒子から見る教育と変化する子ども

ニューロロジーでは、主観空間が素粒子そのものである。それは生後2～3歳の時に芽生える潜在化における ψ_{10} が $\psi_{3\sim 4}$ を交差する領域である。本稿ではこの状態は生命素粒子そのものであると主張する。またシュタイナーは生命力との関連性をいう。

この苦米地は、生命素粒子（気）の特徴として、「①自立的、②動的、③分散的、④協調的」という特性があるという(9)。これらの特性がある生命素粒子は「知的」にふるまってみえるという。これらの特徴は、子どもがまさに生命力快活に遊んでいる状態が想像される。

文化人類学者のホイジンガは、わたしたちが「文化」と呼ぶものはすべて遊びから生まれたと語る。狩猟採集民の文化はそれぞれの社会によって異なるが、総じて遊びの文化はよく似ているという。狩猟採集民は子どもの成長を大人がコントロールできると思っていないので、子どもたちは朝早くから夜遅くまで、終日遊ぶことができる。子どもは学校に行かなくても大人になったときに必要なことを身に着けられるのかという問いに対し、狩猟採集民の社会では、遊びと学習は同じだということがその答えだ。遊びの中で培う技術や知識がそのまま大人になっても使われていからだ。

・教育システムの出現

人間が一か所に落ち着き、農業労働が始まると、作物と同じように子どもも育てる必要があるという考え方をもたらした。都市や国家、宗教が出現し、特に産業革命が起きてから、子どもたちは大人になったときに経済的に自立するため、読み書き、設計、組織運営を学ぶ

ようになった。個人主義と成果主義が幅を利かせ、親は子どもが将来、成功するかどうかを心配し始めた。

そうして徐々に主観空間が主体であった子どもたちの世界は、客観空間に落とし込まれていく。そして時代は流れ、子どもの自由は制限されていった。そして現在、10か国の一万二千人の親を対象とする最近の世論調査では、大半の子どもは屋外で過ごす時間が受刑者より短いことが分かったというデータもある(10)。

・増加する神経発達症

現在の子どもたちは、能力や可能性が高い子ども、低い子ども、適応的か否かという具合に、かつてないほど幼いうちから分類されている。神経発達症は、親の問診からの情報と発達検査、現場での関わる人々情報に医師の診察を加えて診断される。アメリカの広大な土地で育った子どものエピソードを伺うと、日本では確実にADHDと診断されるであろう状態が、アメリカではその診断や心配はされないことがある。逆に日本では問題にならないことが、別国の文化では問題になることがある。

神経発達障害が増えている要因の一つに文化的、風土的慣習による枠組みにはみ出した個性が、神経発達症と診断される傾向があるだろう。そして、それらの基準によって親は心配する。そして親子の間で必要のない不安と心配、緊張が慢性化し、ストレスとなり愛着障害につながる。また神経発達障害傾向があれば、障害も悪化する。これはアメリカのデータではあるが、近年行われたアメリカの学生を対象とする調査によると、その80%が、自分の親は思いやりややさしさより良い成績に関心があると答えているという。

こうして、子どもは自分の人生は他者によって決められる、と感じるようになってきている。他我化の世代間連鎖により、親は自分が感じる感覚に自信を持たずに至り、分からなくなっているケースも多い。すると、ますます自身の子どもが何を考え感じているのかが分からなくなる。こうした親と子どもの関係性が希薄化していることと、愛着障害や発達障害が増加していることは関連があるように考える。

・生命素粒子の反対の性質

生命素粒子の4つの性質の反対の性質を考えてみると、

- ① 自立的⇔①' 他律的
- ② 動的⇔②' 静的
- ③ 分散的⇔③' 支配的
- ④ 協調的⇔④' 対立的・排他的

という具合に、人間型ゲシュタルトと関連するような性質が並んでくる。心理学者のブライアン・サットン＝スミスは「遊びの逆は仕事ではない。うつ病だ」と語った。変換人型ゲシュタルトに関連すると思われる生命素粒子の性質が「遊び」に関連するとすれば、人間型ゲシュタルトでは「うつ病」に関連してしまうように考える。

・いじめについて

「いじめ」という言葉は、やはり子どもたちの間で起こる特有の現象であるかのように慣習的に思うかもしれないが、その根底で働いているメカニズムは大人も子どもも同じだ。いじめは大人社会では、パワハラ、虐待、DVという現象として認知され、その関係性からうつなどの精神疾患が生じる。

いじめはしばしば、人間の本質的な癖とみなされ、感情の抑制がうまくない子どもなら誰でもすると考えられている傾向がある。しかしながら、いじめが蔓延する場所を広範囲に調査してきた社会学者たちは、こうした考えは間違いだという。いじめが蔓延する場所を、社会学者アーヴィング・ゴッフマンは「トータル・インスティテューション（全制施設）」と呼ぶ(10)。全制施設の特徴は、以下のようなものである。

- ・全員が同じ場所に住み、ただ一つの権威の支配下にある。
- ・すべての活動が共同で行われ、全員が同じタスクに取り組む。
- ・活動のスケジュールは、多くの場合、一時間ごとに厳密に決められている。
- ・権威者に課される、明確で形式張ったルールのシステムがある。

これらは、先ほどの生命素粒子の4つの性質と反対の性質が、展開されることが推測できる特徴が並ぶ。この究極の形式が刑務所である。学校も全制施設だ。生徒は、そこから出ていくことはできず、厳密な階層の中に地位を獲得しなければならない。全制施設だと、常に監視され、追い立てられる情動が優位になる。心身は不安と恐怖の情動が優位になり、PTSDに関連する「逃走闘争」状態に近い状況になる。そうすると、脳内は辺縁系優位の思考が基本になる。それは動物的・衝動的思考が優位になる。

・「種我同型論」 - 自我の中の動物と対称性通信 -

天海氏の「種我同型論」では、自我には全動物の情報がホロニックに重畳されている。全制施設的环境になると、脳内が動物脳に関連する、辺縁系優位になる。すると、持続空間の中で、普段は顕在化されていない動物システムと対称性通信を行い同調する。自分の中の動物と通信している状態だ。すると教室というストレスフルな環境だと、「闘争逃走」状態に子ども達の脳内状況は陥る可能性が高くなる。

閉ざされた教室空間の中で、ある者は肉食動物的になり、ある者は草食動物的になる、と

いう具合に食物連鎖のカーブ的な評価基準が個人の主観空間を彩る。そして生存をかけることと、自分のスクールカーブの地位を維持するための縄張り争いをするものが出てくる。この中で弱いものは餌食になる。そうしていじめが起きているのではないだろうか。

いじめという現象は殆ど閉ざされた密室の陰で行われる。「気づき」という光のような認識があると、生存をかけた動物的・無意識的な本能情動を優位とする必要がなくなり、「いじめ」をしなくとも生きることが出来ることを認識する。つまり、動物から「我（人）に戻る」ということが起こる。自我の中の動物関数との対称性通信が途切れるのではと考える。

これは脳神経のメカニズムからの解釈では、扁桃核優位の動物本能的思考から、重心に関連すると思われる帯状回が機能することで前頭前野の人間らしい機能が復帰することとして解釈可能だと考える。この結果、「いじめ」のような不必要な行動が無くなるという現象になると考えられる。いじめが解消されるには、 ψ 3の生命感覚が充足している状態、つまり生命素粒子の4つの性質が担保される環境で、変換人型ゲシュタルトに依ることはいじめが減少するのではないかと考える。

こうした環境のモデルとして、アゴラという学校が参考になるかもしれない。

・いじめがない環境

オランダの南西部にあるアゴラという学校は、狩猟収集民を同じ教育哲学を持っているという、クラス分け、教室、宿題、成績がない学校だ。また、教頭やチームリーダーという階層もなく、あるのは自律的な教師（コーチとよばれる）のチームだけだという。そして、コーチを務めるのは生徒たちだ。

校長は頻繁に校長室から追い出され、生徒がそこで集会を開く。この学校にはあらゆる背景の子どもたちが入学しているという。アゴラは何もかもが自由を推奨するが、最小限の決まり事がある。毎朝学校に行く、毎日一時間静かな時間を過ごす。子ども達が大いに期待されていることを知っていて、コーチの力を借りて、個人的な目標を設定する。アゴラは全制施設とは真逆の環境で、この環境ではいじめという現象が、起こらないという(10)。主観空間が生き生きとする環境か、抑うつ的な環境かでいじめの有無が決まるといえる。

とはいえこうした環境が常識になるには、草の根のニューソロジーなどの霊性知識の普及が前提となるかと考える。

参考文献

- (1) 岡田 隆司「愛着アプローチ」(2018) 角川選書 90
- (2) 苦米地英人「ドクター苦米地が真犯人を追う！」(2012) 宝島社
- (3) 苦米地英人「洗脳原論」(2000) 春秋社

- (4) 苔米地英人 張永祥 「すごい気が出る DVDブック」マキノ出版
- (5) 苔米地英人 「夢がかってに叶う 気功洗脳術」(2010) マキノ出版
- (6) フランク・キンズロー「瞬間ヒーリング QE のすべて」(2023) ナチュラルスピリット
- (7) コニレイ・アンドレアス「ホールネスワーク」(2021) GENIUS PUBLISHING
- (8) 半田 広宣, 春井 星乃, まきしむ「奥行きの子ども達」(2019) ヴォイス
- (9) 苔米地英人「2023 夢がかってに叶う手帳」(2023) サイゾー
- (10) ルドガー・ブレグマン「Humankind 希望の歴史」(2019) 文藝新書

神の再解釈

ニューロロジーから、
インテグラル理論と生命素粒子理論をかけ橋として、
愛着障害・神経発達障害を考察する

河野 宗太郎

【要約】

本稿では、これまでの論考を振り返り、まとめ、総論を行っている。唯物論的思考が優位である人間型ゲシュタルトは近代科学を発展させ、医学モデルを生み出し、多くの恩恵をもたらした。その反面、近代以前の霊性が心理的盲点となり見えなくなった。このことより、愛着障害を始めとする様々な困難な問題が起り、文明の行き詰まり感を生じさせてもいる。この解決として、人間型ゲシュタルトを超越するための新たなゲシュタルトが必要になる。これは変換人型ゲシュタルトであり、霊性領域を含む思考形態だ。この思考装置として超情報場仮説、生命素粒子理論、インテグラル理論を用いて人間型ゲシュタルトを超越した霊性地図の作成を試みた。これに重要なのがⅠ、「素粒子の再解釈（生命素粒子）」、Ⅱ、「次元観察子の解釈と対応の区分け」についてであり、これらについてまとめ、考察した。本稿は5つの連作の内の最終の五つ目にあたる。

V 総論

1. 人間型ゲシュタルトの副作用としての愛着障害

人間型ゲシュタルトによって、資本主義が生み出され、科学技術が発展し物質文明は発展した。これは、幅的な価値観を追い求めることで発展していく方向性である。その結果、他我化が進み、文明の生きづまりとも言える病や障害、社会的な問題が増加していった。その中核には、愛着障害や神経発達障害が存在する。

愛着障害は、幼少期における養育者との肌の触れ合いの程度と質が要因となる障害であるといえる。それは、様々な障害や病、社会的な問題にも関連している。愛着障害はその個人の人生に深く影響を及ぼし、かつ世代間を伝搬し、連鎖する。

この対応について、養育者が自ら子どもとの愛着形成を見直し、改善すれば愛着障害を生み出さなくなる、という発想は短絡的であると思える。また、それは養育者のみに責任を負わせすぎでもあり、対応として無理がある。

何故ならば、愛着障害は、人間型ゲシュタルトの観点での客観空間に存在している個人と個人との間でのレベルでのみで起こっているのではない。それは、持続空間で時空を超えた対称性通信を経て、連鎖反応で反芻し、凝縮されたエネルギーの現象だからだ。

人間型ゲシュタルトから写る個人はそのエネルギーの出口となっている。これが様々な障害や病として表現されているに過ぎない。この全容が人間型ゲシュタルトには顕在化されていないので、愛着障害の問題を人間型ゲシュタルトとしての個人という当事者にのみ責任を転換する発想になりがちだ。

そうなると、この対応はその当事者を治療という名の下に症状に名を付け、分類する。その結果として、時と場合によっては症状や現象を抑圧し、追いやることしか出来なくなる。

愛着障害は、人間型ゲシュタルトという文明病という側面が強い。IT 技術の発展は、愛着障害を増加させていると言われている。だからと言って、人間がいまさら利便性の追求を抑制することは不可能である。しかし人間型ゲシュタルトのままで IT を扱っていると、そのゲシュタルトを強化する方向に向かい非常に危険だと考える。つまりますます絆は失われる。エントロピー増大の法則により、分離と崩壊に向かって心身と人間関係は向かっていく。

2. 愛着障害への対応

人間型ゲシュタルトにより、科学技術の発展と共に医学も進歩した。これによる医学モデルから、様々な疾患や感染症の脅威という課題を克服し、平均寿命を大幅にのばしていった。しかし医学モデルでの対応には限界がある病や現象が増加していった。

この背景に前述した愛着障害や神経発達障害が潜んでいるということが考えられる。IT 技術の進歩によって、この課題はより深刻さを増しているとも言える。

この課題を解決するには人間型ゲシュタルトを超越した視点である変換人型ゲシュタルトの観点が有効である都考える。その初めが四次元の顕在化である。

四次元の顕在化、つまり変換人型ゲシュタルトという領域が在るということ認識し、この方向に活用すると、IT はこの上なく便利な道具となり、人間型ゲシュタルトを超越することがこれまでの歴史に比べ、容易になることが期待できる。つまり変換人型ゲシュタルトの観点からだ IT はヌースの方向性での進化を後押しすることが出来ると考える。逆に人間型ゲシュタルトの観点から IT を用いると、他我化の中にますます埋没していくこととなる。

人間型ゲシュタルトは客観空間の中に自己が落ち込んでいる世界観である。この世界観では、分離と不安が一式となっているため、この不快な情動を解消しようと妄映という蜃気楼を追いかけていく。この過程で、愛着障害は様々な病態として変異し、悪化していく。

愛着障害に取り組むには、次元を上げた場から考察する必要がある。それが霊（スピリット）であり、持続空間からの考察であり、変換人型ゲシュタルトの世界観である。ゲシュタルトによる解釈で、世界観や意味は全く異なる。

持続空間とは、言いかけると記憶の空間である。それは心や認知の領域でもあり、霊（スピリチュアル）の領域でもある。

霊的領域を含めて体系化している理論はインテグラル理論と超情報場仮説・生命素粒子理論がある。これらの持続空間での理論を用いて、メタ倫理的にヌーソロジーから愛着障害

や神経発達障害を考察することは、変換人型ゲシュタルトの立ち位置から考察することであったと考えた。

3. 霊の世界から唯物論的世界観へ

人間型ゲシュタルトと愛着障害は一式のものであると考える。愛着障害という問題を解決するには、このゲシュタルトを超越したゲシュタルトである変換人型ゲシュタルトから問題解決を行う必要がある。そこで、人間型ゲシュタルトと愛着障害がどのような過程で生じてきたかを、近代前から概観し、今後を展望したい。

※

近代が始まる前までの数千年以上の歴史では、人類は霊性を扱う歴史を現代よりも色濃くして過ごしていた。

その本質は、人間の苦悩から救済を目的とした教えとして様々な宗教や知恵の根幹として古今東西に存在する。これは永遠の哲学としてまとめられ、その本質は共通しているという。それは、物質→身体→心→魂→霊という具合にホロニック的に展開する。この過程は、自己中心性の減少を伴いつつ、差異化と統合を繰り返し進む (1)。

近代に入り、この構造をすべて物質的観点に還元して思考するゲシュタルト、つまり人間型ゲシュタルトが圧倒した。結果、科学技術は指数関数的に発達したが、愛着障害を起点とする、現代の生きづまるともいえる、様々な症状を生み出し続ける。

こうした現状において、近代の様々な問題や症状に対して、ステレオタイプ的な過去からの霊性の智慧と技術の応用は、人間型ゲシュタルトの社会では適応できなかった。場合によってはそれらは、カルトやセクトと化し大きな社会問題になった。

こうして伝統的な霊性の叡智は、現代では時代にそぐわずにいる。愛着障害を起点とする症状や問題ばかりが増加と悪化をたどり、収集がつかなくなっている。

人間型ゲシュタルトという客観世界から霊性を適用しようとする、圧倒的な人間型ゲシュタルトの物質科学的観点の前に、無力化し、意味をなさず、劣化していった。こうした過程が現代のスピリチュアルが気休めや娯楽の範疇から抜け出せずにいることにも関連しているのではと思える。そして、トランスパーソナル心理学が劣勢に陥ってきた背景であるといえるのではなかろうか。

しかしながら時代は進み、現代はスパイラルダイナミクス第2層の時期 (※注2参照) に入っている。また、AIの進歩によりますます指数関数的に科学が発展することで、霊性が嘲笑の対象としてではなく、真剣に見直される時代に入った。

ここで、科学を超越 (含んで超える) する形での霊性の新しい地図 (ゲシュタルト) を整理することで、これまでの問題が再解釈され、新たな対応も見出すことが期待される。この

ゲシュタルトで科学技術やAIを用いると、爆発的な転換が期待できるのではなかろうか。

そこでヌーソロジーがこの地図に適していると考え。メタ倫理的に、インテグラル理論と超情報場仮説・生命素粒子理論を人間型ゲシュタルトから変換人型ゲシュタルトの社会への架け橋のツールとして用い、地図を作製し、考察してみた。

考察

ヌーソロジーは、人間型ゲシュタルトから超越した場からの思考であるが、人間型ゲシュタルトとは、異質なので、その間に懸け橋的な役割が必要であると考えた。

それがケン・ウィルバーによるインテグラル理論であり、苫米地の超情報場仮説と生命素粒子理論である。そこにおいて必要なことがI.「素粒子の再解釈」と、II.「次元観察子の解釈と対応の区分け」である。

I. 「素粒子の再解釈」(生命素粒子) について

人間型ゲシュタルトとヌーソロジーのいう変換人型ゲシュタルトの大きな異なる特徴として、素粒子の解釈にある。それは素粒子を宇宙の最小構成単位と解釈するか、主観空間そのものとして解釈するかということである。

主観空間から解釈すると、これは持続空間(情報空間)からの解釈ということになる。持続(情報)空間には、時間は存在しない。「もののあわれ」としての主観空間をどのように解釈するのかによってその意味が異なる。

「もののあわれ」とは、本居宣長が主張する日本人特有の精神のことで、それを一言で表した言葉である。この場合の「もの」とは、単なる物質やモノのことだけではなく出来事や人も含まれる。「あわれ」とは趣深い、感情が動く、という心の動きのことを指す(2)。これはつまり、人間型ゲシュタルトによる幅的な客観空間的な解釈ではなく、変換人型ゲシュタルトの主観空間の解釈に関係すると思われる。それは苫米地の超情報場仮説における情報場とも関連すると考える。

こうした立場では、時間も「過去から未来(人間型ゲシュタルトによる解釈)」と流れるか、「未来から過去と流れる(変換人型ゲシュタルトによる解釈)」か、自由に解釈できる。

物質を先手に取る人間型ゲシュタルトは、「過去から未来へと流れる」直線的時間軸を採用しがちなので、物質から身体、心、が創造されたと考える。その為宇宙に生命である我々が誕生したのは、素朴な偶然の産物だと解釈する。それと同時に生命や人間は泥の寄せ集めで、意味を持ちえないという解釈に帰結する。心も体もエントロピーの法則にのっとなって、終いにはバラバラになっていくという解釈だ。

一方情報(記憶・持続・霊性)を先手に考えると、時間は「未来から過去へと流れる」ゲシュタルトになる。そうなると、物質は霊から誕生するということになる。このゲシュタルトでは、霊から魂、心、身体、そして物質という順に生成されることになる。

霊性は全ての段階の基底でもあり最高位の段階だ。そして「創造的な知性 (3)」でもあるので、未来の人間を超えた知性が重心を起点として物質次元を誕生させたという解釈になる (4)。

観点の違いで、どちらの時間軸でも解釈可能だが、より整合性のある広範囲な解釈が可能であることを鑑みて、苫米地は超情報場仮説の帰結として、時間の解釈について「時間は未来から過去に流れる」というゲシュタルトを採用している (4)。

また苫米地は超情報場仮説において、「もののあわれ」の物理次元の空間を、情報空間の写像として表れていると考える。ここでは物質と生命は連続体である。そのため、この情報空間のそれぞれの場は、ホメオスタシス (恒常性維持機能) の原理が働く。

「もののあわれ」の主観空間を人間型ゲシュタルトで解釈すると、その空間の最小構成単位は素粒子という極小の粒子として解釈することになる。

これに対して、霊性 (持続空間) からの素粒子の解釈によると、超情報場の情報の最小構成単位が生命素粒子であることになる。つまり主観空間が素粒子というニューロロジーの解釈と関連する。これは霊的伝統のプラーナや気、というものと同じであり、ニューロロジーの顕在化における次元観察子 $\psi 3$ 以上からなる生命感覚の主観空間に一致する。

そして、持続空間の中で対称性通信を行いながら、情報は抽象化と等化の過程を経る。その中で様々な発見や発明が行われ、物理次元に写像され、自身の人生と文明が変わっていく。

前稿ではこの例として、飛行機などの様々な発明品が生まれた例と、苫米地による時空を超えたプロファイリングの例を挙げた。

現代は人間型ゲシュタルトが優勢の世なので、この情報空間のホメオスタシスの原理が働く。言い換えると容易に他我化される。それに伴って生きづらさが感じられ、病と障害が生じ、様々な人間関係が悪化し、社会問題化につながる。

これを超越するには重心の「気づき」を意識し、生命感覚を基礎にし ($\psi 3 \cdot 4$) し、自己 ($\psi 5$) を見出す。そして現状 (人間型ゲシュタルト) を超えた思考を行うことで、持続の中で等化の過程を繰り返す。すると抽象度の位置エネルギーがたまり、物理次元に現象化することを繰り返す中で人間型ゲシュタルトが溶解するのではなかろうか。この例としてヴィクトール・フランクルの例や、強迫障害が緩解した事例を取り上げた。

これに必要なのが、コーチング的な人間関係である。そこは、生命素粒子の①自律的②動的③分散的④協調的 (5) というネグントロピーの性質を促進する人間関係だ。これは言い換えると、幅的・数値的解釈で相手に接するのではなく、相手の希望やゴールを常に、無条件に信頼している関係性である。

それに対照的な①他律的②静的③支配的④対立的な関係性は、全制施設をつくる。これは人間型ゲシュタルトのエントロピーを増加させる社会や人間関係を作り出し、「いじめ」の人間関係を構築する。また、個人の中でも自身を責める、自身をいじめる、という形で心身の病を創る（エントロピーの増大化現象）。

この例として、「いじめ」という現象がないと言われるオランダのアゴラの例 (6) を挙げた。

II. 「次元観察子の解釈と対応の区分け」について

愛着障害が起こる場は自己と他者の肌の交わる所である。ここから愛着、絆が発生する。ヌーソロジーでは、この場は「神の定義」の場となる。この場が適切に育たないと、神経系が育たず、損なわれたりする。そうすると神経発達障害と愛着障害は悪化する。

それは様々な感覚過敏、知能の低下やアンバランスさとして現象化する。画一的な人間型ゲシュタルトの世界では生きづらいので、常にストレスにさらされる。結果、PTSD 的な状が慢性化し、MUPS（説明不能な心身の症状）や二次障害としての様々な精神疾患、心身の病に発展もする。

こうした背景から常に自己防衛的な言動が強化され、新しい人間関係の構築を避け続け引きこもり傾向になり社会的・経済的な問題に繋がることも多い。

この育てにくさから、家庭や学校ではいじめや虐待、DV といった現象が紐づいているケースが少なくない。

こうした現象が続き、もともと愛着を求めることをあきらめ、適応・進化した回避型愛着障害が増加し、社会的に成功し、社会もそれを増長させる現象が起こっている (7) (8)。

こうしたどこから手を付けてよいかわからない状況において、ヌーソロジーやケン・ウィルバーのインテグラル理論、超情報場仮説・生命素粒子理論から、状況を整理し、対応する地図が見出されると考える。

・愛着障害・神経発達障害へのアプローチ

すべての次元観察子（象限）は連続的でホロニックに連なっているので、すべてが重要な領域だ。

例えば ψ 1.2 に関連する身体の調子が悪いと、変換人間型ゲシュタルトの知識やヌーソロジーの知識と気づきがあっても、どうしても物理脳の生存を優先する働きにより、抽象度の低い人間型ゲシュタルトの物理次元に閉じ込められる思考と判断を行う。つまりは「逃走闘争」状態でのストレスホルモンの上昇と IQ（思考力）の低下としての生理的反応が起こる。

逆に ψ 1.2 の身体領域が万全でも、人間型ゲシュタルトを超えた高次のゲシュタルトが無ければ、人間型ゲシュタルトに適応し、反芻することで強化し時空を超えて連鎖・輪廻する。

これは例としてヨガや瞑想に熟達したナチスの党員が挙げられる。心身の健康が十分でも抽象度の低いゲシュタルトであれば、全体にとって破壊的な結果を招く(9)。この傾向が行き着いた社会が現代の回避型愛着障害が増加し、作られる社会だ。

こうした背景から、人間型ゲシュタルトを超越しつつ全ての次元観察子を意識し、対応することが必要になってくると思われる。

以下にそれぞれの次元についての愛着障害や神経発達障害、そして人間型ゲシュタルトについての対応について考察する。

【 ψ 1・2】

ψ 1・2の次元はインテグラル理論の4象限の中の、第2・4象限に対応すると考える。4象限の第2象限は、人間の肉体の内部に関連し、第4象限は、肉体の外部環境を指している(10)。

<物質領域(第4象限)>

まず目の前の環境として、第4象限における環境調整があげられる。家庭や職場の環境がどのような状況なのか。例えば日当たりが悪くないか、湿気でカビがないか、騒音があつてとても集中できない状況である…、などの基本的な環境から意識する。それらが極端に整っていなければ心身に悪影響を及ぼすことは誰が見ても明らかだ。

<肉体領域(第2象限)>

次いで、第2象限の身体領域へのアプローチとして、消化器系が弱い愛着障害や神経発達症の場合、グルテンフリーも考慮される場合がある。また、栄養バランスが整っていないことからの、様々な弊害がある。これについて、ヌースマイル等のサプリを含めたアプローチも有用だ。

障害が重く、長く続いている場合には投薬治療をまず行い、療育、運動療法を行う。ニューロフィードバックによる脳内の神経回路を鍛え直す方法も効果的であるという研究もある。ウォーキング、ジョギング、ジムなどの運動施設の利用も良い。

【 ψ 3・4】

<心の領域(第1象限)>

ψ 3・4の領域は、インテグラル理論4象限の第1象限に関連している。対応として、 ψ 3・4については、マインドフルネスや、フォーカシング、本稿で登場したホールネスワーク、各種イメージ療法、呼吸法が適していると思われる。思考による解釈というアプローチよりも、体感的なワークを主に扱う。

【 ψ 5・6】

<インテグラル理論における個人の内面・心の領域(第1象限)>

ψ 5・6については各種、個人的心理療法や個人コーチング的な対応が適していると思われる。主に対話をとした間主観的なアプローチにより、自身の感情、衝動といった背景にある認知や思考というゲシュタルトを意識化し、変化させたり超越させることを目的とする。

【ψ 7・8】

<インテグラル理論における集団の内面・集合意識（第3象限）>

ψ 7・8については、グループダイナミクス的な心理療法、療育、エンカウンターグループ、自助グループが適していると思われる。病態が重い状態であれば、依存症のグループワークから、文化や運動のサークルの活動まで、生命素粒子の①～④までの特性を意図しながら行うとよいと思われる。

【ψ 9・10】

<インテグラル理論における集団の内面・集合意識（第3象限）>

ψ 9・10については、スパイラルダイナミクスを用いて、自身や家族がどのような思考段階が優位なのかを意識化する。特にこの段階はスパイラルダイナミクスの第1思考～第4思考までが該当すると思われる。それについて、インテグラルマインドフルネスを行う(11)。

また、自身以外の思考段階の特性を知り、社会や世界情勢を眺めることで、メタ認知が広がり意識の発達が進められると思われる。

【ψ 11～12】

<インテグラル理論における集団の内面・集合意識（第3象限）>

ψ 11～12については、近代の人間型ゲシュタルトが発生する段階である。スパイラルダイナミクス理論の5～6段階に相当する。この段階を意識し、自身が日常生活でどのような動因をもたされて行動させられているのか。そして、その行動がどのように繋がっていくのかを知る（縁起瞑想）。

また、飽くことのない欠乏欲求が発見されれば、これについてインテグラルマインドフルネスを行う。また、第2層の思考である、スパイラルダイナミクス理論の7以降の思考段階の特徴に目を向ける。自身や人類の意識の発達はまだ上昇することを知る。

【それ以降の段階】

変換人型ゲシュタルトの存在認識がなければ、霊的知識や技法を用いても人間型ゲシュタルトへの適応を無意識に行っているだけで、むしろ人間型ゲシュタルトを強化することになっている可能性がある。

霊的な知識と技法を行っていても、そのゲシュタルトがそのままであれば、その恩恵はその個人が保持しているゲシュタルトを強化する方向に用いられる（例：先に挙げた様にナチス党員多くはヨーガや瞑想に熟達していたことや、オウム真理教などからもこのことがうかがえる）。

ではどのようなゲシュタルト（思考・地図）が必要なのか？

ノンデュアリティ（非二元）の教師として著名なフランシス・ルシールは思考には以下の三つの種類があるとした（12）。

1. 仕事や日常生活を送るうえで扱う実際的な思考。
2. 非二元（霊性）に関する思考。この思考は二元性（人間型ゲシュタルト）の条件付けからマインドを浄化する。
3. 願望、恐れ、疑い、夢想などの人間型ゲシュタルトに関する個人が実態であるということに関する思考。
である。

この3つ目の人間型ゲシュタルトが立ち上がる思考の調整を考える必要がある。

まず、環境の調整（ ψ 1～2。第4象限に関する）を行う。人間型ゲシュタルトの社会では、仕事、生活、経済的状况から常に追い立てられる状況にあるので、定期的にそれらから切り離し、自分の空間を確保する時間を取る。

心身が不健康であれば、脳は防衛本能から人間型ゲシュタルトを維持する。そのための健康と生活管理を意識する（ ψ 1～2。第2象限に関する）。

自分が人間型ゲシュタルトにいると感じられれば、すぐさま自身が持続であるということを感じ取るワークを行う（ ψ 3～5。5～6。第1象限に関する。）。マインドフルネスが役に立つと思われる。

そして、フランシス・ルシールのいう2番目の思考を実践する時間を設ける。つまり霊性に関する思考だ。この例として、ニューソロジーなどが適していよう。また抽象度の高い読書を行うことも有用であると思われる。また、自身の気づきを発信することも意識が定着していくことになる。（ ψ 5～6から ψ 13～14まで）

そうすると自身の持続空間の中で対称性通信が生じ、新たな発見や気づき生まれる。自己からの無条件の好奇心、自分の存在の意味と役割に気が付くきっかけになると思われる。

また、本稿で紹介した人間型ゲシュタルトでは解釈不能な現象（遠隔治療、時空を超えたリーディング、プロファイリング、奇跡的な生存、日常的な霊性）などの再解釈が行われることで、これまでの常識を超えた発想やひらめきが得られる可能性がある。それが、人間型ゲシュタルトが解体し溶解する作用になると思われる。

こうしたことにより、これまで人間型ゲシュタルトにより心理的盲点になり、考えられていなかったことが意識に顕在化され、新しい神経回路が形成される。それにより好奇心が強まり、創造性が高まる。他我化による比較意識が薄まり、自己肯定感、自己効力感が高まっていくと考える。

結論

これまでの愛着障害・神経発達障害に関して、投薬治療、栄養療法、療育、心理療法、霊性／スピリチュアリティからのアプローチなど無数にあり、それぞれの専門領域が他の専門領域を犯し整理がついていない状況がある（範疇錯誤／カテゴリーエラーによる弊害）(13)。

これについては、現代社会がまだ、次元観察子の差異化ができていないことによる混乱であると思われる。この弊害としてクライアントは、どこから手を付けてよいかわからず、ドクターショッピングに陥りスピリチュアル難民になる。

これらの対応について、それぞれの領域についてすべて等しく重要であるということが忘れ去られがちだ。

スピリチュアルの領域からは人間型ゲシュタルトにおける物質科学の医療が禁忌される。

その逆に、現代の医療では霊性（持続）領域の治癒（気功、サプリ、ホメオパシー、エネルギーワークなど）をないがしろにしすぎる。

それぞれの領域が心理的盲点となって、自身以外の領域を潰してしまう。こうしたことを避けるため、あらかじめ霊性（持続）領域をも含めた地図を認識するとよいと思われる。

そして、より大きな地図で空間（持続）を再解釈することより、個を超えた KOSMOS (14) としての進化・発達が加速すると思われる。

以下の表に、ヌーソロジーを下敷きとした、インテグラル理論、超情報場仮説、生命素粒子を元にした地図を作成してみた。本稿のまとめとしての地図ともいえる。

<持続空間のヌーソロジーとインテグラル理論・超情報場仮説・生命素粒子仮説の相関図について>

真・善・美	次元観察子	対応する 4象限	目的・内容
真(客観)	重心(0) ψ 1~2	第4象限	【目的】「闘争逃走」反応に依らない、安定した環境を担保する。 【内容】家庭での自身の物理的居場所の確保・物理的にストレスのない環境
		第2象限	【目的】情報(記憶) / エネルギーを受け取れるように、器である神経を整え鍛える。 【内容】薬物療法・サプリ(ヌースマイル等)・ニューロフィードバック・ウォーキング・ジョギング・ジム・ヨガ・運動感覚に関する療育・QE
美(主観)	重心(0) ψ 3~4	第1象限	【目的】メタ認知の獲得 【内容】マインドフルネス・QE・各種呼吸法
	重心(0) ψ 5~6	第1象限	【目的】メンタライゼーションの獲得 【内容】各種個人心理療法・個人コーチング・フォーカシングなどのイメージ療法・ホールネスワーク・QE
善(主観)	重心(0) ψ 7~8	第3象限	【目的】メンタライゼーションの獲得 【内容】グループダイナミクス的な心理療法、療育、自助グループ・病態が重い状態であれば、依存症のグループワークから、文化や運動のサークルの活動まで ※生命素粒子の①~④までの特性を意図しながら行くとよいと思われる。・QE
	重心(0) ψ 9~10	第3象限	【目的】自身の家系的な業の意識化と、解除 【内容】スパイラルダイナミクス第1思考~第4思考を意識化する。自身がどの思考に依っているか意識化。これについて、インテグラルマインドフルネスを行う。抽象度を上げる。・QE
	重心(0) ψ 11~12	第3象限	【目的】人間型ゲシュタルトから出て、それを解体する。 【内容】スパイラルダイナミクス第5~6思考を用いて意識化。スパイラルダイナミクス第2層を意識化。人間型ゲシュタルトよりも高次の意識・思考の意識化。・QE・霊性の思考に関するワーク、読書。
	重心(0) ψ 13~14	第3象限	【目的】変換型ゲシュタルトの定着化。 【内容】霊性(持続)からの思考。ヌーソロジー。無条件の好

低・抽象度の高さ / 位置エネルギー・高

			奇心、存在の感謝。対称通信であらゆる領域の縁起からの等化・抽象化。これを自身で表現。・ 霊性思考に関するワーク。
--	--	--	--

自己 ($\psi 5$) は発達を経ると、空間の認識 (気づき) 範囲と深さが広がっていく。気づきの範囲が広がれば、対称性通信を行う材料が増えることでもある。それにより、潜在化しているエネルギーも増大し、物理次元 (人間型ゲシュタルト次元) が溶解する影響も大きくなる。

これらの持続 (空間) 領域は、ホロニック (入れ子式) に展開し、重心 (0) に射影している。すべてが重心を起点としている。そのため、愛着障害、神経発達障害のアプローチはまず身体づくりがベースとなるだろう。

抽象度の高い次元 (例えば Ω 、 ϕ 以降) の位置エネルギーがあっても、 $\psi 1 \sim 2$ の次元の神経系が脆弱であり、損傷しては、そのエネルギーを受け取る器がないので、弊害が起こってしまう。運動やサプリ、生活習慣の改善をまずはベースにすることが有用であると思われる。

また、愛着障害や神経発達障害では、養育者との関係が悪化している例が多い。親子関係は人間型ゲシュタルト特有の世界観からの物語である。その家系に先祖代々受け継いできた業が親の思考を形成している。スパイラルダイナミクスをヒントにこれを意識化し、解除する必要がある。

・人間型ゲシュタルトに隠れて見えなかった情報空間／持続 (霊性) のエネルギーを扱う秘伝気功

人間型ゲシュタルトの世界観では、気功で言えば、先天の気 (母親など) と後天の気 (食物など) という物理次元のエネルギー供給のみに視野が狭く絞られている。愛着障害を患うと、先天の気 (養育者からの気) は、現代では親子関係のすれ違い、人間関係の希薄さから求めることが困難だ。

そこで母親などの養育者からのみのエネルギーを求め続けると、個人としての親は気力・体力的に無理があり、かえって問題が悪化し逆効果になる。愛着障害の関係性にある養育者の多くは、自身が愛を受け育っていないので、子どもに何を与えてよいかわからない事例が山積しているように思える。

愛着障害は、先天の気と後天の気の物理次元の有限なエネルギーの循環作用に問題が生じている。つまり、家族関係が希薄で問題が山積している現代で、親子関係からのみのエネルギー循環を期待しても、家族間でエネルギーの奪い合いが起こり、問題と障害が悪化してしまう。これが様々な社会問題に発展している。

親子でこのことに気が付きセラピーを受けることは非常に効果的で価値がある。そして効

果も期待できる。しかし、殆どこのような知識は社会的にマイナーである。そして、行っても時間と費用がかなりかかるという欠点がある。

ここで必要なのが、先天の気と後天の気という有限のエネルギーだけではなく、無限のエネルギーである秘伝功の気を扱う必要がある。それはこれまで人間型ゲシュタルトによる心理的盲点になり、見えていなかった。

人間型ゲシュタルトから出て、四次元の霊性（持続）の視点から見ると、秘伝功のエネルギー（持続・情報空間・霊性のエネルギー）が存在することがわかる。

人間型ゲシュタルトの観点では親は近代社会からの負荷の窓口として機能している。こどもは親からの愛情と食べ物のみで生きていることになる。

霊性（持続）からみると、エネルギー供給は、親や食べ物だけではなく、自然や地球、宇宙をふくめた KOSMOS から供給し、循環できることがわかる。

その際に抽象度（等化）の視点が上がることで、唯物論的世界観では、自身の障害や病、困難な状況についての解釈が変わる。そこにこれまで見えなかった意味が生まれ、これをエネルギーに変えることができる。これは、本稿で考察したヴィクトール・フランクルの例などが参考になるかもしれない。

また、回避型愛着障害は、その根底にある虚無感や不安、恐怖が自身のモノではなく、人間型ゲシュタルトの副産物であることを知り、対応することで大きな覚醒と認識の広がりを得ることが出来る可能性があると考ええる。

— 備考 —

※注1) ・**苦米地理論—CH 理論、超情報場仮説、生命素粒子理論—**

苦米地は自身の研究を進めていく中で、人間の認知の解明を行う過程で自身の仮説を構築し、応用した。その分野は宗教、哲学、数学、物理学など多岐にわたる。その応用として、オウム真理教信者の脱洗脳から、気功の治癒、最近では認知戦の領域など様々に挙げられる。

この過程で気功や治癒、人間の認知（つまりゲシュタルト）、宇宙の仕組みを解明しようとしている。

こうした中、自身の仮説も「サイバーホメオスタシス（CH）仮説」、「超情報場仮説」、「生命素粒子仮説」というように発展、展開している。

これらの仮説は「私たちの認識している空間は、関係性からなる情報空間である。情報空間は階層をもち、その情報の最小構成単位は生命素粒子と呼ばれるユニットで構成される。情報空間の階層性は、抽象度の高い領域から低い領域にまで連続体で存在し、抽象度の

最も低い領域が物理空間として写像された空間で、最も高い領域は「空」という領域になる。そして、情報空間にも位置エネルギーが存在し、抽象度が高ければ高いほど、潜在している情報空間の位置エネルギーも大きくなる。」というものである。

そして時間は存在せず、過去も未来も同時に存在します。時間の流れとして感じる方向性は、人間の認識フレーム（ゲシュタルト）次第で、過去から未来に流れるように見えたり逆に未来から過去に流れるように見えたりする、と考えます。そしてこの宇宙は、私たちが進化した先の未来人が、個々の存在一人一人が場を共有するためとして物理空間を創ったと主張する。

ここでは、苦米地の3つの主要な仮説について、簡単に見ていきたい。

1. 「サイバーホメオスタシス（CH）仮説」

苦米地のいう「サイバーホメオスタシス（CH）仮説」とは、「人間は進化により物理空間のみならず情報空間に対してもホメオスタシスを働かせることができるようになった。よって人間は仮想現実にも臨場感（リアリティ）を持つことができる」というものである。

例えば外気温がどれほど暑くても、体温が60度になつたりはしない。汗をかきながらその汗が気化する過程で身体から気化熱を奪い、体温の恒常性を維持しようとするからである。逆にいくら寒くても、身体の体温も一緒に氷点下になつたりしない。筋肉が震えて熱を生み出し、体温の恒常性を維持しようとする。これは生命にとっての必須の能力である。こうした機能はホメオスタシスといい、恒常性維持機能のことを言う。この恒常性維持機能は物理空間だけではなく、情報空間にも広がっている。だから人間は目の前に存在しない過去や未来、物語などのフィクションという情報にも「手に汗を握る」「心拍数が変化する」という物理的生理反応を起こす。

2. 「超情報場仮説」

苦米地は自身の超情報場仮説において、この世は存在と存在の関係性で構築される情報空間で、その最も抽象度の低い世界が物理空間に当たる。最も抽象度が高い場は「有と無」を包摂する「空」であり、最も低い情報空間は「矛盾」という情報空間になる。そして、抽象度が高ければ高いほど、抽象度の位置エネルギーが存在する。

「超情報場仮説」を平たく言えば、情報空間が存在するということであり、物理空間は情報空間に含まれるということである。情報空間の因果が物理空間に写像される。

3. 「生命素粒子仮説—生命素粒子と気、プラーナそしてエーテル」

生命素粒子仮説とは「物理空間に最小単位があるように、情報空間にも最小単位がある」というのが生命素粒子仮説である。その生命素粒子が原子のような粒として存在し、その粒が勝手に動く。素粒子が集まって、自分の肉体や世界の物理的側面を構成しているように、

生命素粒子が集まって情報空間を作り上げる。生命素粒子の基本的な性質として①動的、②自律的、③分散的、④協調的に動くことになる。

生命素粒子は動的・自律的・分散的・協調的に動きながら、構造化していき、抽象度の階段を上がり、ある時点から知的にふるまっているように見える。

生命素粒子は、私たちの親しみのある日常用語から考えると「気」と同じものである。そしてそれは、インド哲学でいうところのプラナ、気功の「気」と同じ概念である。つまりそれはシュタイナーのいうエーテルという概念にも対応する。

※注2) スパイラルダイナミクス理論はインテグラル理論の支柱の一つだ。これは、ホロニックに展開する8つの意識の発達段階表である。テーブルに表示されている各思考の出現時期も鑑みて、第1思考から第4思考までは、思形(ψ9)に対応し、第5～第6思考までは近代以降に対応すると考える。

また、最初の6つの段階を第1層の段階を名付けられている。それ以降の段階を第二層の段階と名付けている。第1層は欠乏欲求に根差し、第2層は存在欲求に起因する。

クレア・W・グレイブス教授/8つの意識の発達段階

	サバイバル	部族	英雄	絶対主義	個人主義	ヒューマニスト	統合	ホリスティック
	Beige	purple	Red	Blue	Orange	Green	Yellow	Turquoise
人口	1%	1%	5%	30%	40%	15%	5%	1%
出現した時期	10万年前	4万年前	1万年前	5000年前	1700年	1900年	1950年	1970
マズロー段階欲求	生理学的、本能的	安全・安心	愛と帰属	承認	尊厳	本物	自己実現	自己超越
人生のテーマ	生き残るため	部族の安全と幸せ シャーマニズム 神や崇りを飾れる 魔術が信じられている 儀式、禁忌、迷信 民間伝承	望むものを手に入れる 自己中心的 略奪・搾取 衝動的な自己表現 服従への拒絶	絶対的な原理に基づく 行動規範を通じ 平和を求める 強力な権力構造 今を犠牲にして 将来の報酬を得る	利益のために規則を コントロールする 物質主義 成功戦略 ステータス	人類、コミュニティと の密接な繋がり 家族意識 平等な関係性 一体感、共同意識	持続可能性 利益は目的ではない 柔軟性、自発性、機能 性を求める システム、価値感 知識、競争力の統合	すべての存在との 繋がり 調和、神秘的な力 覚醒、悟り
人生のゴール	食べ物を見つける 生理的な満足	精霊を喜ばせる 部族の伝統を守る 確実な存続	伝統からの逃避 力と栄光、名誉	ルールに従うことで平 和を手に入れる	戦略的に成功を 勝ち取る	平等主義 感情の共有 多様性のある 社会の実現	お互いの違いを認め いかに統合できるか	宇宙意識
メタファー	人生はサバイバル	人生は犠牲	人生は戦い	人生は試験	人生はゲーム 世界は機械	人類は家族	人生はシステム	人生は夢
コアバリュー	サバイバル	安全、伝統	パワー、強さ	修養、權威、目的	達成、権力、利益	平等性、正直、関係性	統合性、適格性	体験、謙遜、崇敬
例	新生児、痴呆老人	原始的な部族 シャーマン	英雄、ギャング カルト、過激派	カトリック教会、宗教 的原理主義、政府省庁	ウォール街 資本主義、会社組織	ジョン・レノン、 グリーンピース、 カナダ・オランダの 医療システム		

Memes of Clare W Graves

第1層は視野が狭く、排他的で互いに孤立しており、その動機は主に不足や欠乏の感覚である。人間型ゲシュタルトに対応する。

これに対し、第2層は包括的で、インクルーシブで、統合的であり、豊かさや充足の感覚に基づいている。歴史上この様な意識が大規模に出現したことは一度もなかった。現在でもこうした意識は珍しいとされる。これは、変換人型ゲシュタルトに対応していると考えられる。

参考文献

- (1) ケン・ウィルバー「インテグラル心理学」(2021) 日本能率協会マネジメントセンター
- (2) 高橋暢雄「今まで生きづらかった人こそ『これから』うまくいく」2022 青春出版社 31
- (3) フランク・キンズロー「クオントム・リヴィングの秘密」2014 ナチュラルスピリット
- (4) 苫米地英人「苫米地英人宇宙を語る」2009 角川春樹事務所
- (5) 苫米地英人「2023年夢がかってに叶う手帳」(2023) サイゾー
- (6) ルドガー・ブレグマン「Humankind 希望の歴史」2021 文藝春秋
- (7) 岡田尊司「ネオサピエンス」2019 文藝春秋
- (8) 岡田尊司「死に至る病」2019 光文社新書
- (9) ケン・ウィルバー「インテグラル理論を体感する」2020 コスモスライブラリー
- (10) ケン・ウィルバー「インテグラル心理学」(2021) 日本能率協会マネジメントセンター181
- (11) ケン・ウィルバー「インテグラル理論を体感する」2020 コスモスライブラリー
- (12) フランシス・ルシール「「今、永遠であること」2016 ナチュラルスピリット 46
- (13) ケン・ウィルバー「眼には眼を」1987 青土者
- (14) ケン・ウィルバー「インテグラル理論」2019

著者プロフィール

河野宗太郎

1977年生まれ。長崎県長崎市出身。公認心理士・臨床心理士。帝京大学大学院文学研究科臨床心理学専攻修了。心理職として医療、福祉、教育分野に携わる。幼少期から様々な宗教と関わり、精神的／霊的（スピリチュアル）な領域に強い関心を抱く。精神的／霊的領域（スピリチュアル）と現代心理学や日常の接点・統合について研究を続ける中でヌーソロジーと出会う。ヌーソロジーに大きな可能性を見出し、霊的分野と日常への応用について探求している。